

The Practice of “Commuting to Distant Farms” and Ecological Resource Management in the Yaeyama Archipelago of the Ryukyu Arc : A Case Study Involving Traffic Between “High Island” and “Low Island” from its 19th Century Last Stage to the Beginning of the 20

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 紘司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003832

資料

琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用
—19世紀末期から20世紀初頭における「高い島」と
「低い島」との往来をめぐる事例—

藤井 紘 司*

The Practice of “Commuting to Distant Farms” and Ecological Resource Management in the Yaeyama Archipelago of the Ryukyu Arc: A Case Study Involving Traffic Between “High Island” and “Low Island” from its 19th Century Last Stage to the Beginning of the 20th Century

Koji Fujii

本稿は、琉球弧の最南端に位置する八重山諸島を舞台に、異なる生態系を構成する「高い島」と「低い島」とを丸木舟で往来し、生活を組み立ててきた農耕民による海上の往来を取り扱う。本稿は、この“遠距離通耕”という往来実践を、資源をめぐる相互交渉の空間的広がりとその動態に注目する生態史の枠組みの中で把握する。具体的には、土地台帳とそれに付随する地籍図を研究素材とし、「低い島」の住民が「高い島」において何を所有していたのかを分析し、「低い島」の頭職に就いていた宮良當整（1863～1945）の記した日誌や備忘録、南島踏査を行った笹森儀助（1845～1915）の『南島探験』（1894年）などの民族誌的データを用いてモデリングする。

これらの史料の記述・分析を通して、「低い島」の住民は、自然環境及び利用できる生態資源の偏在に対応するために、「高い島」において水稲耕作地だけでなく各種地目を共同で所有し利用してきたことを示し、通耕実践が環境収容力の拡張を目的とする水平統御の資源利用戦略であることをあきらかにする。

*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程

Key Words : eco-history, raised coral island, commuting to distant farms, horizontal control, Yaeyama Archipelago

キーワード : 生態史, 隆起珊瑚礁島, 通耕, 水平統御, 八重山諸島

Through a case study of the Yaeyama Archipelago located in the southernmost part of the Ryukyu Arc, this paper discusses ocean traffic aboard dugout canoes of the agricultural people who made a living by coming and going between “highland” and “lowland,” each with its own indigenous ecology. The aim is to analyze the practice of “commuting to distant farms” in an ecological framework that focuses on spatial expansion and the dynamism of negotiations over resources. Specifically, I analyze which lowland residents owned land in the highlands by using cadasters and accompanying cadastral maps as research materials, and give shape to the analysis by using the diary and memorandum left by Tosei Miyara (1863–1945)—who was the governor of the lowlands—as well as by using ethnographic data, for example from the “Exploration of the Southern Islands” written in 1894 by Gisuke Sasamori (1845–1915)—who traveled throughout those islands.

By studying the descriptions and analyzing the above historical materials, I show that residents of the lowlands jointly owned and utilized land in the highlands not only for rice-paddy cultivation but also for a wide variety of other land uses in order to cope with the uneven distribution of natural environments and available ecological resources. Furthermore, I clarify that commuting to farms was a horizontal control of resource management strategy aimed at expanding environmental capacity.

1 はじめに	3.2 「高い島」と「低い島」という生態系
2 先行研究と研究対象・方法	4 海上の往来と村落の生活システム
2.1 先行研究の検討	4.1 往来に用いた「刳舟」
2.1.1 蚊と税—病原体、もしくは権力	4.2 村落の対応と惣代—西表島南東部の事例
2.1.2 日常生活を組み立てる—海域世界における生態史	4.3 在地村落との軋轢—西表島北部の事例
2.2 研究の対象	4.4 海域世界における“水平統御 <i>Horizontal Control</i> ”
2.3 研究の方法	5 おわりに—海域世界にみる「海上の道」
3 海域世界にみるネットワークと生態系	
3.1 南琉球弧におけるエスノ・ネットワーク	

1 はじめに

本稿は、琉球弧の最南端に位置する八重山諸島を事例として、異なる生態系を構成する「高い島 *highland*」と「低い島 *lowland*」とを丸木舟で往来し、生活を組み立ててきた農耕民による海上の往来を取り扱う。この農耕民に関して、1904（明治37）年の「琉球新報」（5月3日）は「操舟に馴るゝは實に縣下第一とも云ふべきものにして恐らくは糸満人もこれには數着を輸せざるを得ざるべし」と紹介している。琉球弧における代表的な海洋民は、サバニを操縦し、沿岸での追い込み網漁アギヤーを得意とした糸満系漁民である。にもかかわらず、本稿の対象とする農耕民は、糸満系漁民より舟の操縦技術が優れていたとある。なぜ、農耕民の操舟術が海洋民のそれを上回るのだろうか。本稿の立脚点は、操舟術を高めてきたその背景を明らかにするところにある。そのため、本稿の対象とする時期は、上記の新聞記事の発行前後であり、土地台帳や同時代史料を研究素材として用いる。

本稿の使用する「高い島」と「低い島」という分類概念は、南太平洋を事例として Thomas, W. L. Jr. (1965) の用いたものである。「高い島」と「低い島」とは、この区分別に対応する形で異なる生態系を構成し、本稿の事例とする八重山諸島では、主として水稲と焼畑というふたつの異なるダイナミクスをもった土地利用様式の相違としてあらわれてきた。本稿の対象とする「低い島」の住民は、この異なる生態系を往来し、水稲耕作と焼畑耕作とを営んで生活を組み立ててきたのである。この刳舟を用いた往来を指す民俗語彙はないため、本稿では、浮田にならい「遠距離通耕」（1974: 523）と表記する。この名称からうかがえるように、多くの先行研究は、この往来を「高い島」にある水田を“通い耕す”営みと理解してきた（仲松 1942; 浮田 1974）。しかしながら、この往来によって得られるものは、それだけにはとどまらなかった。おそらく、本稿の問いを解く鍵はここにある。

2 先行研究と研究対象・方法

2.1 先行研究の検討

本節では、先行研究の検討を通して、本稿における問題の所在を提示し、海域世界における生態史という枠組みを導入する。

2.1.1 蚊と税—病原体, もしくは権力

異なる生態系を往来し生活を組み立てる事例は、北東アフガニスタンやバルカン半島における牧畜民の移牧形態¹⁾や中央アンデスにおける農牧複合の生活形態²⁾などの高度差を利用したものをはじめとして、様々な時代や地域において展開されてきた。

それらの中のひとつのパターンとして、マラリアを媒介するアノフェレス蚊 *Anopheles* spp. の生息域と非生息域との往来がある。地中海に位置するサルデーニャの牧畜民は、アノフェレス蚊の生息密度の低い高地に居住し、蚊の活動性が緩慢になる冬季に、生息密度の高い低地へ家畜の羊を季節移動させるという (Brown, P. J. 1981)。また、ヒマラヤ山脈を抱えるネパールでは、マラリアの跋扈する亜熱帯高度帯 (~1,200 m) を避けて、基本的な集落配置は、尾根上・山腹などの温暖高度帯 (1,200 m ~ 1,900 m) を中心としていた (川喜田 1961; 1977)。小林 (1996a; 2004; 2005) は、これらの高度差を用いた生活形態を自然環境に対する文化的適応ととらえている。

これらの事例と同じく、八重山諸島の通耕に関する先行研究は、おもに地理学が先鞭をつけており (仲松 1942; 千葉 1972; 浮田 1974; 小林 1984)、アノフェレス蚊の非生息域である「低い島」と生息域である「高い島」との往来として通耕実践をとらえてきた。地理学の多くの先行研究は、自然環境への適応として把握してきたのである。

一方、郷土史をはじめとする歴史学の領域では、通耕発生の背景に、主としてローカルな政治的文脈を想定してきた。つまり、首里王府の施行した人頭税制度である。1902 (明治 35) 年まで継続した、この旧慣租税制度は、先島諸島 (宮古諸島・八重山諸島) の 15 歳から 50 歳までの男女に、米や粟、反布などを賦課した。この悪評高い租税制のために、喜舎場永珣 (1885 ~ 1972) を筆頭とする郷土史家によって描かれた八重山諸島の近世史 (大浜 1971; 牧野 1972) は、人頭税史といっても過言ではないほど抑圧的なものになっている。そのため、統治機構の仕組みに関する詳細な分析はあっても、被支配者は“民衆”と一語でもって表現されるに過ぎず、もっぱら声無き“納税奴隷”として描かれてきたのである (三木 1980: 10; 高良 1982: 8)。

さらに注目すべきことは、この“税制史観”は、史料的な空白—琉球の近世史料の特徴のひとつに地方文書の数の極端な少なさがある (梅木 2000: 12) —によって拍車が掛けられてきた点である。例えば、通耕に関する先行研究は、主としてふたつのデータ類を用いてきた。ひとつは、朝鮮人漂流者の記録や首里王府の行政文書などであり (伊波 1927; 小林 1996b; 佐々木 1978; 得能 2007)、ひとつは、調査票や聞き

書きによって得られたデータである（浮田 1974; 山口 1992a）。前者は、主として為政者によって作成された史料であり、後者は、聞き書きによって採集されたデータとはいえ、「税制史観」にからめとられた語りを中心となってきた。結果、「低い島」の住民による通耕は、租税制のためにやむをえずマラリアの猖獗する「高い島」へ往来してきたという“搾取の構図”を表象するものとされてきた。

以上のように、既往の先行研究や一般的言説は、「高い島」と「低い島」との往来の背景に“蚊”や“税”といった特殊な環境因子を当てはめてきたのである。声無き被支配者層の往来は、徹底して環境決定論的な解釈の下に置かれてきたため、「低い島」の住民にとってこの往来が、どのくらい日常生活に埋め込まれた実践であったのか、どのような工夫を重ねてきたのかという環境可能論的な検討が十分に尽くされてこなかったといえる。こうした問題意識から筆者はさきに、フィールドワークや土地台帳の分析を通して、旧慣租税制度の撤廃をもたらした地租改正後における通耕実践を対象とし、その歴史的趨勢を論じたことがある（藤井 2010）。その結果、遠距離通耕の興隆期が近代期にあったことをあきらかにした。とはいえ、史料的な空白や水田に焦点を絞ったことなどの研究素材や分析視角の不足のために、地租改正前における通耕実践の実態に十分に迫ることができなかったといえる。

2.1.2 日常生活を組み立てる——海域世界における生態史

本稿では、これらの問題を踏まえ、通耕という現象を日常生活の中でとらえるために、資源をめぐる相互交渉の空間的広がりとその動態に注目する視点、すなわち、秋道（2000）の唱える生態史の枠組みを導入する。これに向けて、沖縄という地域区分を越えてアジア・太平洋地域の海域世界を対象とした、文化・歴史生態学における生態類型の研究成果と島嶼間交易を扱った民族学や文化人類学の研究成果とを参照する。

本稿の対象とする事例を理解するには、「高い島」と「低い島」という生態類型を考慮する必要がある。この生態類型を主として検討してきたのは、文化・歴史生態学の領域である。そして、そのフィールドを担ってきたのは、“天然の実験室”といわれる海域世界のオセアニアである（Goodenough, W. H. 1957; Sahlins, M. D. 1958; Kirch, P. V. 1980）。1950年代以降、文化生態学の影響を受けた文化人類学者らは、資源利用と社会集団との関連性について検討し、土地保有の体系を自然環境への適応様式のひとつとしてとらえてきた。その代表的な論者であるサーリンズ, M. D. (1930～)は、ポリネシアをフィールドとし、土地保有の体系について類型化を試みた際に、「高い

島」と「低い島」とにみられる出自集団に際立った差異をみいだしている（須藤 1984: 210）。

平衡系としての人間－自然系を前提とする文化生態学に対して、1990年代以降、人間－自然系のあいだに景観 *landscape* という媒体を措定し、ここに刻まれた人為の痕跡を読み解くことを目的とした歴史生態学の領域が活発化してきた（Kirch, P. V. and Hunt, T. L. 1997; Balée, W. (ed.) 1998）。英語圏を中心とした、この長期にわたる居住史と自然史とを総合する領域においても、「高い島」と「低い島」という類型は、有効な分析枠組みとして用いられている（山口 2009）。このように、このふたつの生態類型には、海域世界における生態史を構想するうえで十分な蓋然性があるといえる。

しかし、これらの研究は、その関心から単数の人間－自然系を自己完結的に分析する傾向があり——閉鎖系として（文化生態学における“交換適応モデル *exchange adaptation model*”を例外として）——、複数の人間－自然系同士の相互関係に対する視座は不十分であったといえる（Orlove, B. S. 1980）。せいぜい、その閉鎖系に対する外部衝撃として議論の俎上に載るのは、“侵入的 *invasive*”として概念化された *bird flu* などの感染症や生物種の移入に限られている（Balée, W. 2006: 87–90）。むしろ、この相互関係に焦点をあててきたのは——開放系として——、主として民族学や文化人類学における交易研究であった。

「低い島」の住民は、「高い島」と比べると相対的に“生態資源”——土壌 [肥沃度] [酸性度] [保湿度]・水・植生・鉱物などのある生態系に包摂される物のうち、そこに生活する人間が有用であると認識した自然物や現象（印東 2007b: 13）——が乏しい不利な環境条件に順応するために、誇張的な“物語”を用いた有利な交換レートでの仲介交易、凸レンズ型の地下淡水層 *Ghyben-Herzberg Lens* 上部における根茎類栽培（ピット栽培法）、救荒食料としてのクワズイモ *Alocasia* spp.（またはインドクワズイモ *Alocasia macrorrhiza* (L.) G. Don）の移入など、種々の手段を採用し居住してきた（牛島 1977; Alkire, W. H. 1978; サーリンズ, M. D. 1984: 286–330; 印東 1994, 2007a; 風間 2006）。島嶼同士の交易・交換の“結びつき”は、それらの手段のうち代表的なものである（マリノフスキー, B. 1967; Sahlins, M. D. 1962: 415–433）。秋道は、この“結びつき”をエスノ・ネットワークという語彙を用いて表現している（秋道 1995: 145–186）。ここで、「高い島」と「低い島」という生態類型を前提としたエスノ・ネットワークの典型的な事例として、①ミクロネシアにおける Sawei 交易、②メラネシアに位置する New Ireland 周辺における交易を参照する。

ミクロネシアの Sawei 交易は、その広域・長距離性において多くの注目を集めてきた (Lessa, W. A. 1950; Alkire, W. H. 1965; 牛島 1987: 281-305; 柄木田 2006)。Sawei 交易は、“Outer Island” と呼ばれる中央カロリン諸島からウルシー環礁を結節点とし、「高い島」であるヤップへ、1,000 km 以上に及ぶ交易体系を成してきた。交易の対象となるのは、ヤップの住民にとっては、象徴的な価値をもった腰布やヤシ製品、伝統的な航海術などの職能化された技術知識などであり、“Outer Island” の住民にとっては、「低い島」では入手することの難しかった土器、赤土 (カヌーの塗料)、玄武岩 (火打石・砥石)、竹、ベテルナッツとキンマ、ヤムイモ、サツマイモ、ウコン、タカセガイ製の装飾品などの生態資源などが中心となってきた (須藤 2008: 207-208)。

また、ニューブリテンの東側に位置する New Ireland は、その東側に点在する Northern Solomon Islands と交易を行ってきた (Terrell, J. 1986: 122-151)。交易の対象となるのは、New Ireland の“貝貨 *Kemetas*” と、離島の特産品であった染料や土器、豚、カヌーなどである (Kaplan, S. 1976: 82)。この事例では、New Ireland は「高い島」であり、その東側の小さな離島は「低い島」に対応している。

以上のように、「高い島」と「低い島」という生態類型は、その生態資源の偏在を補完するためにエスノ・ネットワークを形成する傾向がある。こうした「低い島」の住民による交易は、生態資源に乏しい環境に順応するための生活戦略であり、または象徴的な価値をもった資源を入手するためのものであり、これらの工夫を通して日常生活を組み立ててきたのである。とはいえ、「低い島」の住民による生活戦略は、モノの交易にのみ特化してきたわけではない。

交易を基盤としたエスノ・ネットワークは、異なるサブシステム集団同士を前提としたモデルとなっているが、後述するように、本稿の事例における特徴は、「低い島」の住民が「高い島」に各種地目を所有し、日常生活を組み立ててきたところにある。これらを踏まえ、本稿では、海域世界における資源をめぐる相互交渉の空間的広がりとその動態に注目する生態史を構想するにあたり、生態類型を記述・分析の枠組みとしつつ、交易モデルとは異なる所有モデルの資源利用をあきらかにすることを目的とする³⁾。

2.2 研究の対象

「高い島」と「低い島」という生態類型は、主としてオセアニア研究から導き出された分類法であるが、琉球弧においても適用することができる (目崎 1978; 小林 1984; 1996b; 安溪 1988)。表 1 は、地形や地質、土壌、水文などの自然環境、及び人

文環境を加味した八重山諸島にみられる生態類型である。植生や感染症、土地利用様式などの多くの面で「高い島」と「低い島」とに差異が認められる。この区別は、当該地域の民俗語彙にあらわれている。郷土史家の喜舎場（1977: 50）の報告によると、山や川、水田があるという意の“ターグニ〔田国〕”から転訛したタンゲンと、野原ばかりであって、川や山、水田がないという意の“ヌーグニ〔野国〕”から転訛したヌンゲンという分類呼称がある。ヌンゲンは地形的に起伏がほとんどないため、焼畑を主とする土地利用様式に適していた。一方、起伏のある地表部を河川が流れるタンゲンは、水稲耕作が可能であった。すなわち、これらの民俗語彙は、人間活動を含めた生態系をふたつに分類するものといえる。本稿はこの在地の分類体系にならない「高い島」と「低い島」という生態類型を分析枠組みとして用いる。

浮田（1974）によると、新税法施行以降において海を越える通耕に従事してきた「低い島」は、鳩間島、竹富島、新城島である。本稿は、石西礁湖の中にある新城島と西表島の北部に位置する鳩間島とをおもな調査対象地としている。新城島は、上地島と下地島とをあわせた総称である。行政上は、沖縄県八重山郡竹富町に属し、北緯24度、東経124度、西表島の南東約6.0 kmに位置する。上地島は、周囲6.2 km、面積1.8 km²であり、下地島は、周囲4.8 km、面積1.6 km²である。一方、鳩間島は、行政上沖縄県八重山郡竹富町に属し、北緯24度、東経123度、西表島の北約7.0 kmに位置する。周囲3.9 km、面積1.0 km²の鳩間島は、新城島と同じく典型的な「低い

表1 八重山諸島における生態類型

	高い島	低い島
自然環境		
地形（山地 / 丘陵）	有 / 大起伏丘陵	無 / 小起伏丘陵
地形（台地 / 低地）	砂礫段丘 / 谷底低地	石灰岩段丘 / 海岸低地
地質	古期岩類・火山岩	琉球石灰岩（第三紀島尻層）
土壌	赤黄色土	テラロッサ
水文環境	河川系	地下水系
森林	多	少
アノフェレス蚊	生息	非生息
人文環境		
民俗呼称	タンゲン	ヌンゲン
土地利用様式	水稲耕作 + 畑作耕作	焼畑耕作 + 常畑耕作
主要栽培穀物	稲	粟

自然環境の項目の一部は、目崎（1978: 23）を参照した。また、安溪（1998a; 1998b）によると、「高い島」の住民は、水稲耕作を中心にし、集落の近くの常畑で蔬菜類など、遠くの焼畑でサツマイモや穀類・豆を栽培してきた。

島」であり、古くは珊瑚の造礁によってできた島で、琉球石灰岩をおもな地質とする。このような地形は水捌けがよい反面、生活水の確保が難しく、農作物の生産性も低い。1737（乾隆2）年の「諸村難易之所柄相しらへ⁴⁾」によると、新城島については「右風気能有之候得共、地方石原ニ[㊦]畠地狭有之二付、海路壹里余之所到往通作毛仕候故、難住居所」、鳩間島については「右地方狭ク有之候得共風気能、海路壹里余之所到往通作立⁵⁾手広ク相成所ニ[㊦]住居安所」と記しており、両島ともに「海路壹里余」の耕作地に通耕していることがわかる。また、両島ともに「風気能」とあり、風土病（マラリア）はないとある。

2.3 研究の方法

本稿は、土地所有の側面から通耕実態を裏付ける史料として、竹富町役場の所有する土地台帳とそれに付随する地籍図を用いた。これらの史料は、沖縄県の場合、1899（明治32）年から実施された沖縄県土地整理事業によって作成されたものである。そのため、明治政府の巡察使や租税制度調査官などが作成した報告や統計とともに読み解くことができる。後述するように、地租改正時は、土地に対する村落の価値基準が明確化していた時期であったため、資源利用の実態を土地台帳上の所有権から把握できる史料となる。

具体的には、土地台帳とそれに付随する地籍図の分析を通して、「高い島」にある各種地目の土地所有実態とその形態について検討した。まず、土地台帳に関しては、記載項目（「字」、「地番」、「等級」、「地目」、「反別反」、「地價圓」、「地租圓」、「沿革」、「登記年月日」、「事故」、「所有質取主住所」、「所有質取主氏名」）を相互に照らし合わせ、合計2,083筆の土地について土地所有者の属する大字を1筆ごとに特定した。なお、必要に応じて、これを地籍図上で彩色表示した「土地の所有者住所大字分類」を行った（藤井2010）。地籍データの欠如した箇所は、税務課に保管されていた旧公図を適宜用いて復原した。

また、モデリングの素材としては、「宮良殿内文書」（琉球大学附属図書館所蔵）や野本らによる聞き書き資料を用いた。とくに、新城村の頭職に就いていた宮良當整（1863～1945）の記した日誌「新城村頭の日誌」と備忘録「必要書類集」を使用した（竹富町史編集委員会町史編集室編2002; 2006）。同じく、同時代史料としては、笹森儀助（1845～1915）の『南島探験』（1894年）を参照し、図像史料としては、1890年代の前半に作成されたと考えられる「八重山古地図」（沖縄県立図書館所蔵）や「八重山蔵元絵師の画稿」（石垣市立八重山博物館所蔵）を使用した。また、聞き書きに

よるフィールドデータは、生態資源の伝統的利用方法を知るために補完的に用いた。

統計データとしては、1885（明治18）年当時の村落の実態をまとめた田代安定（1857～1928）による復命第一書類（国文学研究資料館所蔵）のうち第28冊「八重山島管内西表嶋仲間村巡検統計誌」と第35冊「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」、1892（明治25）年時の統計データ「沖繩縣八重山嶋統計一覽略表」（沖繩縣八重山嶋役所1894）、1893（明治26）年時の「八重山島共有各村定数船現在調」（法政大学沖繩文化研究所2005:29-31）を用いた。

3 海域世界にみるネットワークと生態系

3.1 南琉球弧におけるエスノ・ネットワーク

本節では、本稿の対象とする19世紀末期から20世紀初頭の状況について言及する前に、八重山諸島に関する最古の史料である15世紀後葉の朝鮮人漂流者の証言録や「低い島」である多良間島に関する18世紀の史料を用いて、先島諸島（宮古諸島・八重山諸島）の地域構造を生態類型のネットワークとして把握する。

まず、15世紀後半の済州島の漂流民の見聞を記した「成宗大王實録」105巻（1479年）を参照する⁶⁾。ここには、「モノ」のやり取りが詳細に記されている。図1は、島嶼別の生態環境と漂流記の記載情報をまとめたものである。ここには、「材木」、「稻米」、「炊飯用鐵鼎、無足似釜」の移入をみてとることができ、その移入のあり方を「貿易」、「貿易」、「取」という文言で表現している。これによると、先島諸島における木材供給の中核は、「高い島」である西表島が担っていた。また、河川系の水文環境を基盤とした「高い島」において栽培可能な「稻米」も「貿易」の対象となっており、隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」に移入されている⁷⁾。

次に、宮古島と石垣島の間位置する多良間島に注目する⁸⁾。多良間島は「低い島」であり、西表島や伊良部島から森林資源を「取」とある⁹⁾。また、15世紀後葉の漂流記では「無稻」とあるが、1752（乾隆17）年に編纂された「宮古嶋記事¹⁰⁾」には、「八重山嶋の内平久保村へ多良間田と有之候由来の事 右多良間嶋之儀小離之故にて毎物不自由ニ有之八重山嶋へ致渡海隣嶋之取合睦敷有之多良間嶋より拾八里之所平久保村罷渡或ハ田を耕し或は材木を求め積渡嶋用為仕由候依之爾今平久保村へ多良間田と有之候事」（平良市史編さん委員会編1981:61-62）とある。これによると、多良間島民は「毎物不自由」なために、石垣島の北部に位置する平久保半島に“多良間田”

と呼ばれる水田を所有し、材木を求めていたとある。

また、1771（乾隆36）年3月10日、先島諸島を襲った明和大津波のために極度に疲弊した多良間島民は、冬期には宮古島からの援助が止まったため、八重山諸島に老若男女計227人の受け入れを求めている。「八重山島年来記」には、「上納米より壺人

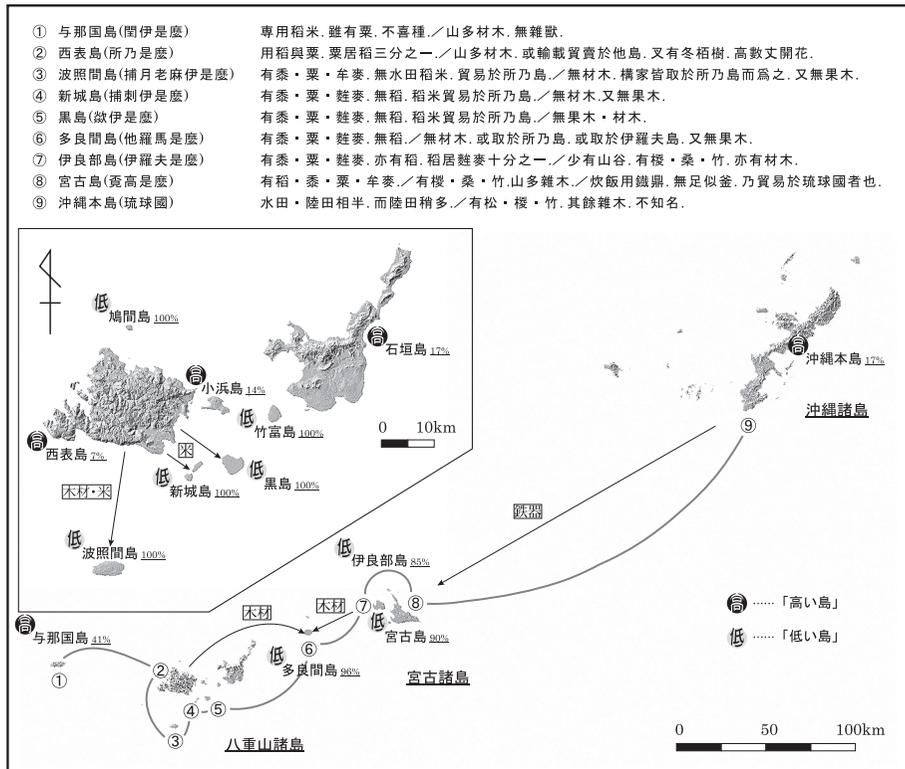


図1 島嶼別生態環境と「成宗大王實録」(1479年)に記載された朝鮮人漂流者の移送経路及び交易関係図

基図には、国土地理院発行の50mDEMを使用した。「成宗大王實録」の記載情報は、日本史料集成編纂会編(1979)を参照した。なお、各島名の右に表記した数字は石灰岩地質の割合である(目崎1980)。

朝鮮人漂流者は、①から⑨の島嶼を経由し、本国へ移送されている。この記録によると、宮古島では、琉球国との「貿易」によって鉄製の釜を使用している一方、与那国島では、「無釜鼎・匙筋・盤孟・磁瓦器、埴土作鼎、曝日乾之、熏以藁火、炊飯五六日輒破裂」(日本史料集成編纂会編1979: 961)とあり、土を練って形を造り、日干しした後に、藁火で燻した、素焼きの粗製土器を使用している。ただし、「有鐵冶而不造耒耜、用小鍬剔田去草」(日本史料集成編纂会編1979: 962)とあり、おもに南島で使用されてきた木の柄に鉄の刃先をはめ込んだ耒耜「小鍬(ヘラ)」を打つ鍛冶はいたようである。この鉄の移入に関しては未詳ではあるが、少量であっても琉球国から与那国島への「モノ」の流れがあったと考えられる。ちなみに、「琉球國郷帳」(1668年)によると、1635(崇禎8)年に設定された波照間島の田高は37石と報告されており、17世紀前半には、天水田における水稲耕作が開始されていたことがわかる。「琉球國郷帳」は、『續々群書類従第九』(國書刊行會編1906: 311-321)に収録されている。

ニ而日ニ四合先ツ、相渡、根気付^{次第村々}□□□□江配分ニ而口持させ」(石垣市総務部市史編集室編 1999: 86)とあり¹¹⁾、「低い島」の住民にとって「高い島」とのネットワークは、災害に対するセーフティ・ネットとして機能している。

このように、「低い島」の住民にとって「高い島」とのネットワークは、日常生活を組み立てるためであり、かつ非常時におけるセーフティ・ネットとして機能していることがわかる。先島諸島(宮古諸島・八重山諸島)の地域構造は、生態類型のネットワークとして把握する必要がある。

3.2 「高い島」と「低い島」という生態系

次に、「高い島」と「低い島」という対照的な生態系を意識しつつ、本稿の研究対象地である西表島を中心とする人間一環境系について記述する。笹森儀助の『南島探験』は、西表島の南北横断を含めた踏査記録であり、19世紀末の同時代史料として貴重なモノグラフである。本節では、『南島探験』や宮良當整の「新城村頭の日誌」、そして「沖縄縣八重山嶋統計一覽略表」(沖縄縣八重山嶋役所 1894)の情報を基に、当時の状況を復原する。

亜熱帯海洋性気候に属する西表島の大部分は、亜熱帯の自然林の被覆する山岳地帯であり、標高 450 m 前後の連山と大小無数の溪流や河川が発達し、河口や内湾の汽水域には、広大なマングローブ林を形成している(写真1)。一方、ひとの居住地は、



写真1 「高い島」の景観—西表島南東部の南風見田
西表島の大部分は、亜熱帯の自然林の被覆する山岳地帯である。そのため、河川系が発達している。図の中央に見える牧草地は、南風見村の水稲耕作地だった旧南風見田である。(筆者撮影 2010年9月3日)。

海岸線沿いの僅かな地域に限られていた。笹森の記述に、「西表ハ全島有病ノ巢窟トス加フルニ時方ニ炎熱病猖獗セントス」（笹森 1894: 140）とあるように、当時、「高い島」に生息していたアノフェレス蚊によって「ヤキー」と呼ばれる熱病マラリアが蔓延っていた¹²⁾。近世期における開墾の進展と明和・大津波の被害とによる原生林相の破壊に伴って死亡率の高い熱帯熱マラリアを媒介するアノフェレス蚊 *Anopheles minimus* の生息域が拡大し、「有病地」に位置する多くの村落は、18世紀以降、明らかに衰退の過程にあったのである（千葉 1972; 山口 1992b）。

19世紀末期、八重山諸島における社会階層は、公認の家譜を有する士族階層と、平民階層とに分けられていた。首里王府は、八重山諸島の統治のために、石垣間切・大浜間切・宮良間切の三間切制を施行し、各間切には最高位の「頭」を設けていた。本稿で取り上げる宮良當整は、頭職をはじめ多くの役人を輩出してきた宮良家の当主である。村落の運営は、これらの村番所に勤める士族層の村頭（旧与人）と、平民層の代表である惣代や下役（田ぶさ、小横目、猪垣当、佐事、筑など）とによって担われた。

南島踏査の際に笹森は、西表島の東部に位置する古見村の村吏に、この「戸口減少」に対する対策について問うている¹³⁾。これに対して、村吏は「私ハ俸給ヲ受ケ家族ヲ養フ者ニテ、如何スレハ人口ノ減少ヲ防クニ宜シキカ何モ救済ノ法ヲ辦セス、唯年功ニ依テ此地位ニ至ルノミト」（笹森 1894: 153、読点は著者）と返答している。この答えに笹森は「驚愕」し、「士族ハ平民ヲ制御シテ自己ノ家族ヲ養ヘハ足ル」（笹森 1894: 153）と憂いている。実際、本稿の対象とする西表島の南東部に位置する仲間村・南風見村と、北部の上原村・浦内村は、笹森によって「廢村ノ徴アル村名」（笹森 1894: 320–321）としてあげられている。

1893（明治26）年、笹森の踏査によると、南風見村は戸数9戸、人口29人（男16／女13）を数えている。ただし、「其他農夫男女數十人合宿居スル」（笹森 1894: 158）とあり、通耕に従事していた「低い島」の住民は、同村に寝泊まりしていたようである。農事暦¹⁴⁾ からして稲刈りの時期であり、この作業には女性も参加していたことがわかる。聞き書きによると、田植えや収穫のような労働力を必要とするときには、女性や子供なども動員されるが、除草や獣害防除の見回りなどは、基本的に戸主が中心となっている。これは、マラリア感染に脆弱な女性や子供、老年層などに対するリスク回避のためである。そのため「低い島」の住民は、家の労働力を水稲と畑作とで配分し、「高い島」に位置する水稲耕作を壮年・若年層の男性が担い、「低い島」に位置する畑作耕作を女性や老年層が担うことが多かった。

「低い島」の薄い石灰質土壌は、その中に十分な養分を蓄えることができない。そのため、集落から近い“ウチバタ〔内畑〕”では、豚糞尿を主とする肥料や灰を用いつつ、サツマイモや蔬菜類、タバコなどを栽培し、集落から遠い“アリバタ〔荒蕪せる畑〕”では、夏季頃に繁茂した草木に火入れし、粟や麦、豆などの混栽・輪作を行ってきた（仲吉 1895: 24）。野本（1984: 568-569）によると、戦前まで、私有地・共有地にかかわらず一括して火入れしたという。19世紀末期、八重山諸島全体での畑地の比率は、常畑が全畑地の1/3であり、焼畑は2/3を占めていた（仲吉 1895: 24）。

笹森の踏査した前年（1892年）の属人統計に記載された農産収穫物類の石高・斤目を参照すると、「低い島」の村落にとって、通耕が欠くことのできない生活基盤となっていたことは疑いようがない（表2）。このことがうかがえるエピソードをひとつあげると、1900（明治33）年の旧暦4月10日、本稿の対象地である「低い島」に、土地整理出張官員が測量調査のために滞在している。この際に、村落の代表者である惣代は、税金対策のために、島内の海辺近辺の原野を国有にし、「高い島」にある共同牧場（後述するムラボカ牧場）を村有にしたいと申し出ている（竹富町史編集委員会町史編集室編 2006: 117-122）。海辺の原野は、防風林・防砂林となるアダン *Pandanus odoratissimus* L.f. やソテツ *Cycas revoluta* Thunb. などが生育し、炊事で用いる薪や山羊の飼料などを入手することができた。しかし、村共同の土地を多量に村有とすることは容易ではないとし、海辺の原野は国有とし、一方、島外の「右牧場限ハ

表2 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略表」（1892年）にみる村別農耕・牧畜概況

	人口 (人)	耕地 (歩)		農産収穫物 (石)				農産収穫物 (斤)				家畜 (頭)				
		田	畑	米	粟	大豆	大麦	小麦	砂糖	藍	煙草	甘藷	牛	馬	山羊	豚
西表島																
西表村	541	899,209	249,510	633	—	2	—	—	354	1,851	228	513,572	143	25	11	192
上原村	118	321,823	158,427	227	—	1	—	—	146	7,155	144	277,392	83	14	6	55
仲間村	9	30,907	17,316	22	2	2	—	—	—	1,151	88	12,844	9	2	—	9
南風見村	30	78,218	9,411	55	—	—	—	—	—	1,070	110	16,504	32	9	—	16
鳩間島																
鳩間村	163	195,615	353,319	92	—	—	—	—	—	456	22	82,360	55	—	2	53
新城島																
新城村	229	135,629	378,927	96	54	—	6	5	—	1,013	871	275,820	110	—	12	82

この統計では、新城村は、1,013斤のリユウキユウアイ *Strobilanthes cusia* (Nees) Kuntze を収穫している。この藍畑は西表島にあり、集落（上地・下地）持ちの共同畑であった（竹富町史編集委員会町史編集室編 2006: 398-399）。1901年の作付面積は5畝21歩である（竹富町史編集委員会町史編集室編 2002: 301）。また、時代を遡って15世紀後半の「成宗大王實録」によると、西表島の祖納（西表村）では「用稻與粟、粟居稻三分之一」とあるが、1892年の統計には、粟の収穫高が記録されていない。（「沖縄縣八重山嶋統計一覽略表」（沖縄縣八重山嶋役所 1894）により作成）。

今ヨリ必要」とし、村有として登記するよう主張している。次章で記述するように、地租改正時（1903年）に村有として登記された箇所は、「低い島」の住民生活にとって欠くことができなかつたことを物語っている。なお、村落が主体となって利用してきた各種地目を村有もしくは国有で登記するののかという土地整理出張官員との話し合いでは、土族層の村頭を仲介としつつ、村落の平民層の代表である惣代たちの判断を尊重しているところにとくに注目する必要がある。

一方、笹森は「人口九人ノ中四人ハ無病地ヨリ移セシ者ナリ」（笹森 1894: 157）にあった仲間村について「本村ノ滅亡ハ必ス遠キニアラサルヘシ」と述べている。また、1899（明治 32）年に、仲間村に立ち寄った新城村の村頭の宮良當整は、「万喜や（萬木屋）」と「石垣や（石垣屋）」とに家族が数名いて¹⁵⁾、茶請けや陶器を用いた酒肴による饗応もあったが、その2年後の旧暦 10 月 4 日に巡回した後は、「各家内破壊ナリテ…（中略）…人間ノ住居様ニモナシ…（中略）…今ヤ此ノ有様ニ到ルカト追想スレハ寂々トシテ妙ナル感情ヲ引起セリ、嗚呼其氣ノ毒ナルコト名状ス難キ次第ナリ」（竹富町史編集委員会町史編集室編 2006: 540）と、その惨状を記している。

このように、マラリアの猖獗と村吏の無策とによって有病地に位置する村落は衰退し、1892年の統計では、西表島の人口密度は3.7人/km²になっている（沖縄縣八重山嶋役所 1894）。これに対して、周辺のマラリアのない「低い島」の人口密度は、新城島 68.6人/km²、鳩間島 169.8人/km²であり、比較にならないほど高密度になっている。狭隘な耕作地しかない「低い島」の本来的な環境収容力をはるかに上回っていたことが予想される（近森 1988: 64–75）。実際に、「至近年人数余多繁栄仕候付、作場狭ク罷成百姓及困窮候」（石垣市総務部市史編集室編 1995a: 93）という「低い島」に対する常套的な文言は、18世紀の史料を中心に頻繁に用いられてきた。一般的に、焼畑を主とする地域では、人口の増加に対して耕地面積の拡大でもって対応せざるをえない。ところが、隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」の土地は限られたものである。先に紹介した18世紀の史料の中で、困窮という内圧に対して「高い島」の土地開拓へ関心が向いているのはこのためである。実際に、1739年から1746年までの間に、数度にわたる大きな台風に見舞われた新城島では、「模合貯米」が底を突くほどの被害を出した。そのため、西表島にある「やしら野」（後述するヤッサのこと）の土地を「九こうし」（方言でクージ。1クージは1,600坪）借地したとある（仲地 2002: 24）。「低い島」には、直接風をさえぎるものがないために、とくに大きな被害を出しやすいのである。そのため、各畑の周囲には、防風対策として防風林の造成や珊瑚を乱積みし、独特な景観を成している（写真2）。



写真2 「低い島」の景観—琉球石灰岩と珊瑚の乱積み

上は、削岩機を用いた排水管の埋め込み作業（竹富島のアイノタ集落内）。石灰岩地質の土地を掘り起こすのは、たとえ削岩機を用いても難渋を極める。後ろに見えるのは、珊瑚の乱積み。防風機能をもった珊瑚の乱積みは、畑周りだけでなく家周りにも配置される。畑周りの乱積みをアジラ、家周りの乱積みをグックという。（筆者撮影2010年9月15日）。

本節では、18世紀以降、「高い島」において起きた植生変遷によって、強力なアノフェレス蚊の生息域が拡大し、有病地に位置する村落が疲弊し、衰退しつつあったこと。一方、隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」の環境収容力が飽和しつつあったことをあきらかにした。また、20世紀初頭は、地租改正を実施する土地整理事業の最中であり、土地に対する村落の価値基準が明確化していた時期でもあった。「低い島」の住民は、「高い島」に位置する通耕先に水田だけでなく各種地目を共同で登記してきたのである¹⁶⁾。これまでの先行研究では、“税制史観”にとらわれて、もっぱら米に焦点を絞って記述・分析がなされてきた。そのため、水田以外に所有してきた各種地目に関して、正面切って語られることはなかった。これらの問題を踏まえ、次章では土地台帳の分析を通して、日常生活を組み立てるためにどのような各種地目を所有してきたのかを詳細に記述する。

4 海上の往来と村落の生活システム

4.1 往来に用いた「刳舟」

本稿の対象とする通耕には、一本の材木を刳り抜いた丸木舟を用いてきた。これに

は、主として西表島にあるリュウキュウマツ *Pinus luchuensis* Mayr を用いた。1893（明治 26）年の「八重山島共有各村定数船現在調」（法政大学沖縄文化研究所 2005: 29-31）によると、八重山諸島における政治経済的な中心地であった石垣島や、孤島の与那国島・波照間島などと比べて、それ以外の離島の所有する刳舟数がかなり多いことがわかる（表 3）。これは通耕に用いるためであり、かつ行政的な中心地であった石垣島への所用のために渡航する必要があったためである。前章でふれた朝鮮人漂流者の移送のような非日常的なネットワークとは質的に異なる日常的な往来生活を支えるものである。

この史料によると、本稿の対象とする新城村には「四反帆」と「三反帆」とが 1 隻ずつ、刳舟は 11 艘とある。一方、鳩間村には「五反帆」が 1 隻、刳舟は 27 艘となっている。「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」によると、遡ること 1885（明治 18）年、本籍鳩間の平民 32 戸のうち 13 戸がそれぞれ 1 艘の丸木舟を所有している。このうちの 1 艘は、寄留糸満の加治工伊佐の所有であるため、通耕のために用いた刳舟は 12 艘である。つまり、3 戸に 1 戸以上の割合で刳舟を所有していたことになる。これが 1893 年には、2 戸に 1 戸以上の割合となり、刳舟の個別所有が進んでいることがうかがえる。また、史料にある「反帆」とは、八重山諸島ではマーランとも呼ぶジャンク型の船で、後で詳述するように、収穫の際などにも用いた。

20 世紀に入って、3 枚の厚板を刳り抜いてはぎあわせた糸満系のサバニが普及してきたが、これは単材の丸木舟を作るには多大な労力と費用とを必要とすること、複材化すると単材刳舟の 1 艘分の丸太から 4、5 艘分の材料がとれるという経済的な理由

表 3 島嶼別の船舶保有数（1893 年）

	人口（人）	戸数（戸）	一戸あたりの 刳舟所有割合（%）	舟の種類と隻・艘数				
				刳舟	五反帆	四反帆	三反帆	傳馬船
石垣島	8,970	1,783	4.1	73				
小浜島	402	101	26.7	27				
西表島	526	165	28.3	33	2	2	1	1
与那国島	2,102	379	0.5	2				2
竹富島	956	153	17.6	27	1			
黒島	585	125	17.6	22				6
鳩間島	163	37	73.0	27	1			
新城島	229	54	20.4	11		1	1	
波照間島	665	126	5.6	7	1			

人口と戸数は「沖縄縣八重山嶋統計一覽略表」（沖縄縣八重山嶋役所 1894）により、舟の種類と隻・艘数は「八重山島共有各村定数船現在調」（法政大学沖縄文化研究所 2005: 29-31）により作成した。

によるところが大きい（川崎 1991: 420–421）。

これらの各種を操舟し、「高い島」と「低い島」とは往来されてきた。以下の節では、ふたつの「低い島」にみられた通耕形態の対照性（狭域集中型／広域分散型）に注目しつつ記述する。

4.2 村落の対応と惣代—西表島南東部の事例

本節では、西表島南東部における新城村民の通耕事例について検討する。この地域は、18世紀に波照間島からの「寄百姓」によって創立された南風見村¹⁷⁾と、古見村から分村したと推測される仲間村とが位置していた。南東約6.0kmには新城島があり、西表島の南東部は、この「低い島」からの通耕先となっていた。1892（明治25）年当時の新城村は、戸数54戸、人口229人であり、田の耕作面積は135,629歩、畑378,927歩を数えている（沖縄縣八重山嶋役所 1894）。サツマイモの収穫高は275,820



図2 西表島南東部（大字南風見・大字南風見仲）と新城島（大字新城）（1903年）
この図では、大字南風見の水稲耕作地のみを表示している。表4から読み取れるように、新城村民の耕作地は、複数の小字にわたっていたが、俯瞰的にみると近接する小さな小字らの塊の中に位置していた。（国土地理院発行1:50,000地形図「西表島南部」（1921年測図，1923年発行）に加筆して作成）。

表4 西表島南東部の小字別にみた地目別の筆数と「田」の所有質取主住所別の筆数（1903年）

大字	小字	地目別の筆数（筆）											総筆数 （筆）							
		宅地	田	「田」の所有質取主住所分類					畑	原野	牧場	山林		保安林	池沼	溜池	坪所	墳墓地	雑種地	不明
				西表島		新城島		その他												
				南風見	仲間	古見	新城													
	A 南風見	4	2	2	—	—	—	—	2	32	—	2	—	3	—	—	—	1	—	46
	B 山田野	—	23	17	—	—	6	—	—	10	—	—	—	—	—	3	13	—	—	49
	C 南風見田	—	50	37	—	—	11	2	—	12	—	—	—	—	1	—	1	—	—	64
南風見	D ムラボカ	—	16	2	—	—	14	—	—	9	2	1	—	—	—	—	—	—	—	28
	E ザラザキ	—	4	—	—	—	3	1	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14
	F 大保良田	—	113	2	—	—	109	2	—	18	—	1	—	—	1	—	—	—	—	133
	G 佐久田	1	56	—	—	—	53	3	—	105	—	—	—	—	6	—	—	—	—	168
	H ナカシイ	2	4	—	—	—	4	—	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	9
南風見仲	I アガリ	2	—	—	—	—	—	—	2	28	—	6	1	—	—	—	1	—	—	40
		9	268	60			200	8	4	226	2	10	1	3	8	4	15	1	—	551
	J 屋敷	—	10	—	1	2	5	2	—	17	1	3	—	—	—	2	—	—	—	33
	K ヨコイダ	—	4	—	1	1	—	2	—	11	1	1	—	—	—	—	—	—	2	19
	L ウフマタ	—	4	—	—	2	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	1	7
M 田春	—	13	—	—	12	—	1	—	5	—	—	—	—	—	1	—	—	—	19	
		—	31	2	17	5	7	—	33	2	5	—	—	—	3	1	—	3	78	

表の見方：小字ごとに地目別の筆数の総計を読み取ることができる。「田」の所有質取主住所分類の項目では、その小字に位置する「田」の所有者がどこに住んでいるのかを読み取ることができる。例えば、Dのムラボカという小字には、16筆の「田」が登記されているが、このうち2筆を大字南風見に住所を置く個人（西表島の南風見村の住民）が所有し、その他14筆を大字新城に住所を置く個人（新城島の新城村の住民）が所有していることがわかる。また、地租改正時（1903年）、「畑」として登記している土地はかなり少ないといえる。おそらく、土地台帳の「原野」は、焼畑の対象となる休耕地を含み、さらに衰退の過程にあった村落に対する土地整理出張官員の配慮があって、本来「畑」として登記するべきところを「原野」として登記したと考えられる。なお、佐久田は、おもに天水田であった（安里1976:2）。（土地台帳により作成）。

斤にのぼり、粟は54石、一方、通耕による米の収穫高は96石であった（表2）。

やや時期が遡るが行政上の往復書簡集である「参遣状抜書」では、1704（康熙43）年当時、「大浦やすら」——現在ではヤッサと呼ぶ（図2）——にある空き地を新城村民が田畑として耕作していることを報告している（石垣市総務部市史編集室編1995a:56,59）。これに対して、首里王府は、在地村落である古見村の承諾を得ることを条件とし、田畑の島外耕作を承認している。

このように、「低い島」の住民と在地村落との耕作地が混淆した箇所もあったため、イノシシなどによる獣害を防ぐための猪垣の築造は共同の作業を求められた。よく知られているように、「高い島」である石垣島や西表島は、リュウキュウイノシシ *Sus scrofa riukiuanus* の生息地である。ブナ科樹木の優占する森林が大量の堅果（ドングリ）を供給するために、その生息数は非常に多く、「田圃の半分はイノシシのもの」という古老の謂いもあながち誇張ではない。そのため、古くから猪垣をイノシシ防除

の技術として用いてきた（千葉 1970）。近世後期の史料には、これらの猪垣に関する記事が散見される。1768（乾隆 33）年に首里王府の名で在番・頭に布達された文書「与世山親方八重山島規模帳」には、「南風見村作場之内仲間、新城式ヶ村作場も有之候処、猪垣之儀ハ南風見村計^二相調迷惑之由候間、仲間・新城式ヶ村^江も作地境切を以猪垣配分可申渡事」（石垣市総務部市史編集室編 1992: 56）とある。南風見には、仲間村や新城村の耕地もあり、南風見村の負担を軽減するために、他の2村にも猪垣の築造を担当させることという通達である。

猪垣には、①石を積んで障壁とする石垣、②斜面を削り障壁とする切り土、③大岩や断崖などの自然物を猪垣の一部として利用する他、杭を打っていき横木をトウツルモドキ *Flagellaria indica* L. で縛ったもの、メダケ *Pleioblastus simonii* (Carrière) Nakai を切りそろえ、地面に挿し込んで横に3段の竹を配置させるもの、サガリバナ *Barringtonia racemosa* (L.) Spreng. を1列に密植させた生垣などがあった（野本 1987: 516; 花井 2003; 蛭原 2009）。数年で朽ちる木材や竹製の猪垣は、周辺から調達したものを随時継ぎ足し補修した。

19世紀末、笹森の記述には「村ノ周圍及耕地ノ周圍ニハ必ス石垣ヲ繞ラス」（笹森 1894: 183）とあり、集落の周囲にも猪垣を巡らせていた。明治中期頃に作成された

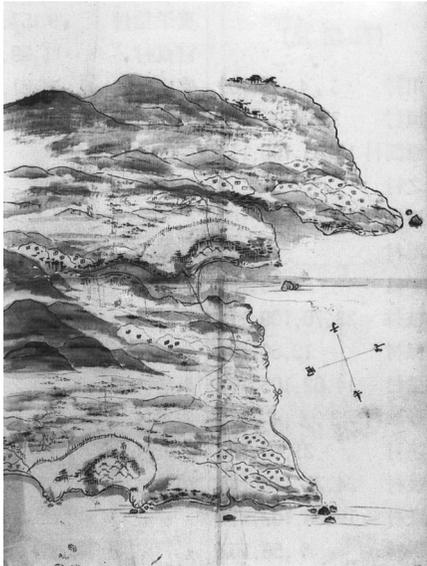


図3 「八重山古地図」にみる西表島南東部集落（仲間村・南風見村）を囲む防風林の外側に、大規模な猪垣を確認することができる。（沖縄県立図書館所蔵）。

「八重山古地図」でもこれを確認することができる（図3）。ただ、「石垣ヲ村圍ニ繞ラスモ尚ホ足ラスシテ犬ヲ以テ防禦ニ充ツル」（笹森 1894: 184）として、猪垣のみで獣害に対応することは難しく、別の対策としてイノシシなどを追い払うために犬を飼養していることがわかる。「八重山島管内西表嶋仲間村巡検統計誌」によると、1885（明治 18）年当時、仲間村では20頭の沖縄本島産の猟用犬が飼われていたようである。犬の売価は、一頭につき米一斗である。イノシシを主とする獣害対策に、とくに腐心してきたことがうかがえる。

通耕先の村落との協同関係がうかがえる獣害対策であるが、新城村の住民は、西表島のムラボカに共同牧場¹⁸⁾を所有し、

牛馬を放牧していた。1903（明治36）年、新城村は、①〔南風見/ムラボカ/186番（2,429）/新城村〕—〔大字/小字/地番（反別反）/所有質取主氏名の順番〕—を村持ちの「牧場」として登記している¹⁹⁾【土地台帳】。1892年の統計では、新城村は、110頭の牛を飼養していた（沖縄縣八重山嶋役所1894）。宮良當整の日記に、このムラボカ牧場に関する興味深いエピソードがある（竹富町史編集委員会町史編集室編2002: 258–263, 267–273）。これによると、1898（明治31）年当時、牧場の近隣には、ザラザキ農園が位置していた。ムラボカ牧場は、「慣例」的に放牧に近い状態で²⁰⁾、ザラザキ農園に牛馬が度々侵入し、農地は被害を被ってきた。そのため、経営者である田中清三は、新城村民を代表する惣代と、「石壁築造」の約束を取り付けたという。この約束を果たすように、新城村事務所に10人の人夫を3日間派遣するよう文書で依頼している。結局、感情的なやり取りに終始し、この「石垣築造」が履行されたかどうかは未詳であるが、平民層の代表である惣代が「高い島」に位置する農園主と交渉に当たっていることがわかる。

次に、森林資源の利用について言及する。「八重山島管内西表嶋仲間村巡検統計誌」によると、1885（明治18）年当時、西表島のプリミチ山の北部は、新城村の柚山であり、首里王府は18世紀前葉から制度的に「低い島」の柚山を「高い島」の森林地帯に認めてきた。しかし、イヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Sweet などの良材は、王府の規制によって—士族層の住宅用あるいは蔵元の御用材となる—、平民層の建築材として使用することができなかった。そのため、ソメモノイモ *Dioscorea cirrhosa* Lour. でこれを赤く染めて、雑木に紛らわせて運搬したという（安里1976: 6）。このイモ（方言名クール）は、ヤマノイモ科ヤマノイモ属のつる性の植物であり、根から赤褐色の染料を取ることができる。からむしで織る上布の染料にもなるクールは、「高い島」の生態資源のひとつであった。

宮良當整の1900（明治33）年の旧暦3月9日の日記には、「当村惣代又ハ惣代資格アル村民ニシテ新城山林境界詳知ノ者壺名古見村迄差遣スバキ旨通達」（竹富町史編集委員会町史編集室編2006: 84）とある。当時、八重山諸島は土地整理事業の最中であり、測量調査に当たる土地整理出張官員は、共有林の境界を明確にし、査定図面を取る必要があった。そのため、土地整理出張官員は、柚山の境界を把握している惣代などを、西表島の古見村まで派遣して欲しいと依頼している。これらの共有林の範囲は、惣代などによって把握されていたことがうかがえる。なお、これらの土地は、国有林として登記されるに至っている。

また、森林資源は伐採し持ち帰るだけでなく、苗の状態でも移入していた。翌年

の日記には、共有林から数種類にわたる苗を採取し、旧暦4月15日と18日とに分けて、イヌマキを計320本、フクギ *Garcinia subelliptica* Merr. を計716本、島内にある“ヤマ”などに植林している（竹富町史編集委員会町史編集室編 2006: 360–363, 390–393）。「低い島」の植生がこれによって大きく変遷したか未詳ではあるが、おそらく、これらを育てて、海辺の防風林や炊事で用いる薪用に利用したと考えられる。

前章で述べたように、地租改正時（1903年）に村有として登記した各種地目は、「低い島」の住民生活にとって欠くことのできなかつたものである。新城島からの通耕の事例で特筆すべきことは、田小屋の建っている「宅地」を村持ち、すなわち、共同で所有していたことであろう²¹⁾（図4）。田小屋とは、通耕生活における寝食空間である。広さは大体4m×4mで、中柱はタブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc., その他の柱はアダンやヤマグワ *Morus australis* Poir. を用いた（野本 1987: 511）。壁や屋根の材料はチガヤ *Imperata cylindrica* (L.) Raeusch. var. *koenigii* (Retz.) Pilg. であり、竹で床を張った。「低い島」の住民は、島内にある焼畑の休耕地などからチガヤを調達し、住居の屋根をふいたが、「高い島」に位置する田小屋に用いるチガヤは、その周辺から採取・調達していた。

田小屋は、マラリア感染を避けるために海岸の近辺に立地していた。ここから、新城村民の中心的な耕作地である大保良田と佐久田に通った。1903（明治36）年当時、小字大保良田の全113筆のうち109筆は、新城村民の個人所有であった（表4）。こ

の大保良田は、“センゴクタバル〔千石田原〕²²⁾”と表現されるほど大規模な耕作地であった。一方、南風見田（写真1）は、ほぼ南風見村の個人所有の水田となっていた（図5）。1903（明治36）年、新城村は、①〔南風見/佐久田/395番〕、②〔南風見/ナカシイ/507番〕、③〔南風見/ナカシイ/508番〕の3箇所を村持ちの「宅地」として登記している【土地台帳】。①の田小屋は、笹森の記述でいう「東方海濱ニハ新城島黒島人民ノ耕作小屋六七軒有り」（笹森 1894: 161）に相当し、国土地理院発行 1:50,000 地形図



図4 「八重山蔵元絵師の画稿」にみる明治中期頃の田小屋生活
吸い物などの食事の準備。慣例として年少者が炊事当番となる。ほかに、女性用の笠、馬の鞍、水甕などを確認することができる。（石垣市立八重山博物館所蔵）。

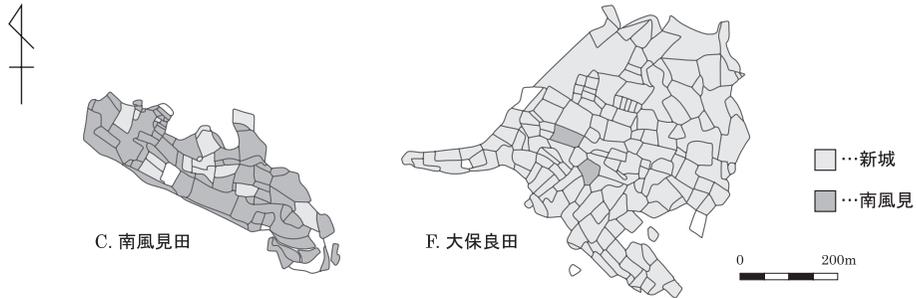


図5 南風見田・大保良田における土地の所有者住所大字分類（1903年）
 対応する地番は、南風見田（字南風見96～159番）、大保良田（字南風見202～334番）である。ただし、抽出した地番のうち、分類は以下の条件下のものに限る。
 1) 土地台帳の「所有質取主住所」項目が、大字の「新城」、「南風見」であること。
 2) 土地台帳の「地目」項目が、「墳墓地」、「牧場」、「溜池」、「山林」、「(官有の)原野」を除く、「田」、「原野」であること。（地籍図、土地台帳により作成）。

「西表島南部」（1921年測図，1923年発行）においても、この建物群を確認することができる（図3）。住民は、この箇所を“ソーデ”と呼んだという（山口1992a: 237）。また、②と③の田小屋は、南風見村の集落のすぐ背後に位置していた。前節で紹介した、笹森の目撃した南風見村での「其他農夫男女數十人合宿居スル」（笹森1894: 158）とは、この田小屋と南風見村の空き屋敷などを利用した合宿であったと考えられる。また、収穫された稲の運搬には、三反帆船を用いたという（安里1976: 81）。

4.3 在地村落との軋轢——西表島北部の事例

次に、西表島北部における鳩間村民の通耕事例について検討する。この地域は、上原村と、その枝村である浦内村²³⁾が位置していた。北約7.0kmには鳩間島があり、西表島の北部は、この「低い島」からの通耕先となっていた。1892（明治25）年当時の鳩間村は、戸数37戸、人口163人であり、田の耕作面積は195,615歩、畑353,319歩を数えている（沖縄縣八重山嶋役所1894）。サツマイモの収穫高は82,360斤にのぼり、一方、通耕による米の収穫高は92石であった（表2）。

先の節で紹介した西表島の南東部での新城島からの通耕は、“センゴクタバル”と呼ばれるような狭域集中型の形態をとっていた。一方、鳩間島からの通耕先は、甚だしく耕地分散が進んでおり、土地の所有者住所大字分類による復原は容易ではない。また、遡ること1737（乾隆2）年の「諸村難易之所柄相しらへ」でも、鳩間村民の通耕している耕地は「手広ク」と表現されている。図6は、土地台帳とそれに付随する地籍図や旧公図を併用し、解析・復原した西表島の北部における水稻耕作地の分

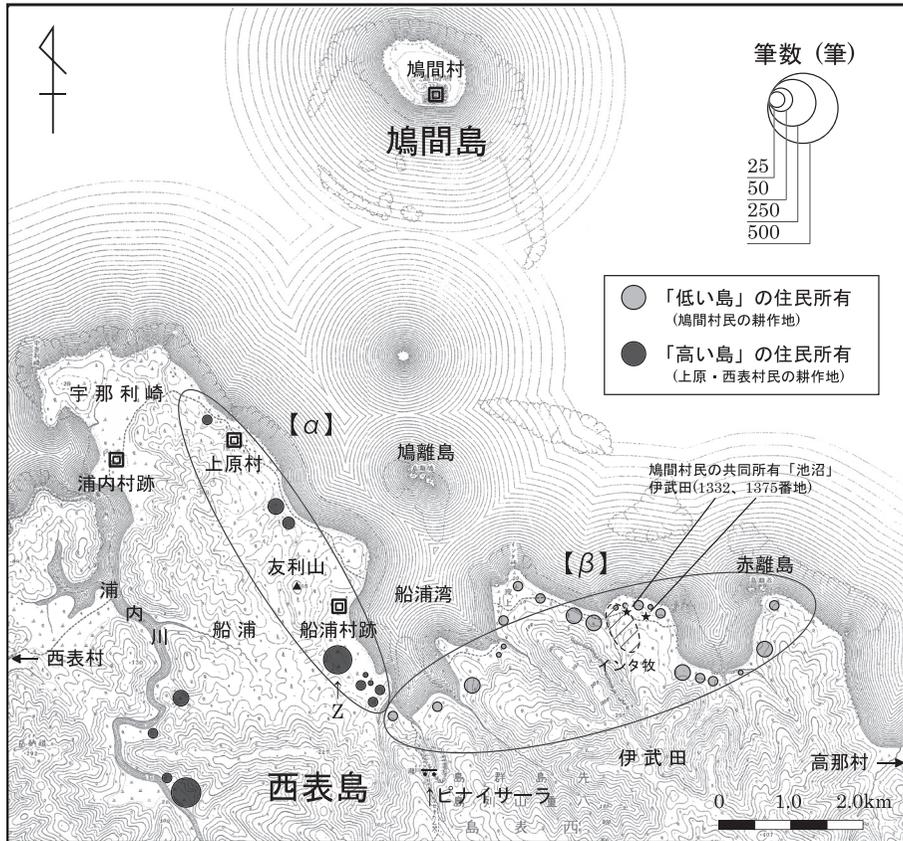


図6 西表島北部（大字上原）と鳩間島（大字鳩間）（1903年）

この図では、大字上原の水稲耕作地のみを表示している。「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」によると、1885（明治18）年当時、西表島の「友利山」は、鳩間島の柚山である。「低い島」の住民は、「高い島」から建築材や舟材などを調達し利用した。そのため、「高い島」を分布域とする樹木であっても、「低い島」の住民の使用する方言名があったという（花城・盛口2010: 96-97）。また、鳩間節では、西表島の北岸の海岸一帯を“南端”と表現している。この言葉使いの中に、在地の地理感覚の一端を読み取ることができる。なお、鳩間村民の田小屋は、伊武田の海岸沿いに点在していた。浦内川上流の水田に関しては、安溪（1978: 35）に詳しい。（国土地理院発行1:50,000地形図「西表島北部」（1921年測図，1923年発行）に加筆して作成）。

布図であり、伊武田に位置する通耕地の広域分散の性格を読み取ることができる²⁴⁾。後述するように、この広域分散性は、在地村落との歴史的な因縁に由来し、形成されてきたと考えられる。

この歴史を紐解くために、ある古謡を読み解こう。1893（明治26）年7月17日、划舟を雇った笹森は、小雨降る鳩間海峡を渡った。上原村から出航し、運賃は1人につき6銭であった。この際に、笹森は「稻草苧取濟ミ運搬最中ニテ數艘ノ「ヤンハ

表5 西表島北部の小字別にみた地目別の筆数と「田」の所有質取主住所別の筆数（1903年）

大字	小字	宅地	地目別の筆数（筆）							畑	原野	牧場	山林	保安林	池沼	溜池	坪所	墳墓地	雑種地	不明	総筆数 （筆）
			田	〔田〕の所有質取主住所分類					その他												
				西表島			鳩間島														
				高那	上原	西表	鳩間														
上原	N 宇那利崎	2	48	3	30	9	5	1	126	338	1	9	1	1	—	2	—	—	—	—	528
	O 船浦	9	291	9	170	81	31	—	29	162	1	10	—	2	—	4	17	—	—	—	525
	P 伊武田	—	311	1	35	86	189	—	14	49	1	2	—	2	—	—	—	18	—	—	397
	Q 鳩離	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	4
		11	650	13	235	176	225	1	169	550	4	23	1	5	—	6	17	18	—	—	1454

伊武田は、大きな範囲をもった小字であり、図6のβ域を含んでいる。（土地台帳により作成）。

ラ」船ハ稻ヲ山ニ積帆ニ任セテ往來セリ」（笹森 1894: 147）と、鳩間村民の操船する稲穂を積載した山原船の往來を目撃している。当時の穀物貯蔵の方法は、「シラ」と呼ばれる稲叢・粟叢での保存であり、くわえて藁の利用は生活上欠くことのできないものである。そのため、穀物類は、脱穀せずに運搬している。

この鳩間海峡での出来事に前後して、笹森は、上原村の南東に位置する船浦村跡を訪れ、「船浦村ノ舊跡アリ今ハ森林繁蔚シテ寂寞ヲ極ム」（笹森 1894: 145）と記している。この船浦村に関する史料は極めて乏しいが、鳩間節と呼ばれる名高い古謡に謡われている。この古謡は、通耕に携わってきた住民が伝承したものであり、海上の往來に対する自負が込められてきた²⁵⁾。

その大意を紹介すると、鳩間村民の通耕地は、上原・船浦村民の耕作地より地味が肥沃であり、収穫した稲や粟²⁶⁾を満載した舟々が鳩間海峡を往來しているというものである（図7）。1914（大正3）年、石垣島の郷土史家喜舎場永珣は、鳩間島の古謡に詳しい成底タマーニ（当時74歳）から歌詞や解説を聞き取っている。この古老の伝承によると、もともと鳩間村民は、上原・船浦地域（図6のα域）の荒蕪地を開墾して、農作業に従事していた。ところが、これらの通耕による収穫量は、在地村民のものよりも多かったという。そのため、不信を抱いた在地の住民は、鳩間村民に耕作地の返還を迫ってきた。鳩間村民は、仕方なく新しい開拓地を求め、実地踏査の結果、伊武田（図6のβ域）を最適地と判断し、新たな通耕対象地にしたという（喜舎場 1924: 186–190; 1967: 325–334）。

この口承伝承は、通耕先の村落とのなにかしらの歴史的な因縁があったことを示唆している。そのため、鳩間村民が酒を飲んで酔うと、この鳩間節の歌詞のおちに「上原人ぬ、くるだら、蛤ぬ殻し、酒飲まし。舟浦人ぬ、くるだら、アデンガーぬ、殻しミシ飲まし。²⁷⁾」という諧謔的な句をつけ足したという。

鳩間中岡ばりぬぶり、 (ナカムリに駆け登って)	蒲葵ぬ下に、ばりぬぶり。 (クバの下に駆け上がった)
かいしや、生いたる岡ぬ蒲葵。 (美しく生えたる岡のクバよ)	ちゆらさ、列りたる頂ぬ、くば。 (高く並びたる頂のクバよ)
まんが、南端、見渡せば、 (対岸の海辺を見渡して)	濱ぬ見るすや、小浦ぬ濱。 (見えるのは小浦の浜)
小浦ぬ濱から、通ゆる人や、 (小浦の浜を通う人々は)	蔵元ぬ前ぬ、人心。 (蔵元の前を歩くような大様な心持ち)
インダ、フク濱、下離、 (新しい開拓地は)	舟浦地やが、ましぬ地。 (船浦の耕地よりも肥沃である)
☞ 図6のB域	☞ 図6のα域
舟浦人ぬ、見るみん。 (舟浦の住民は、見ているだろう)	上原人ぬ、聞くみん。 (上原の住民は、聞いているだろう)
稲ば作り、みゆらし、 (稲を作って稔らした)	粟ば作り、みきらし。 (粟を作って実らした)
前ぬ渡ゆ、見渡せば、 (前の海峡を見渡して)	往く舟、来る舟、面白や。 (舟の往来するは愉快な眺めである)
なゆしやる舟ぬど、通ふだ、 (どんな舟が往来している)	いかしやる舟ぬど、かしやらくか。 (いかなる舟がこんなにある)
稲ば積付け、面白や、 (稲を積み込み、ああ愉快)	粟ば積付け、偕て美事。 (粟を積み込み、さあ見事)
-----	-----
上原人ぬ、くるだら、 (上原の住民が来たら)	蛤ぬ殻し、酒飲まし。 (ハマグリので酒を飲ませよう)
舟浦人ぬ、くるだら、 (舟浦の住民が来たら)	アデンガーぬ、殻しミシ飲まし。 (樗の実の殻斗で神酒を飲ませよう)

図7 鳩間節の歌詞と意訳

鳩間島のナカムリは、ビロウ *Livistona chinensis* (Jacq.) R. Br. ex Mart. var. *subglobosa* (Hassk.) Becc. で覆われた丘陵状の森(標高31.4m)である。鳩間節は、このナカムリから対岸の西表島の重なった連山とその手前の小浦の浜、そして前景となる鳩間海峡を往来する舟々を望んで叙情的に謡ったものである。鳩間島から対岸を眺めると、小浦の浜は、白砂を敷き詰めたまっすぐな小道のように見える。この海岸沿いに、鳩間村民の耕作地が点在していた。そのため、この小浦の浜は、鳩間村民にとってなじみ深い“小道”であった。なお、歌詞にある蔵元とは、石垣島にあった中心的な行政機関の名称である。(喜舎場(1924: 186-190)により作成。筆者意訳)。

このような通耕の引き起こした係争の類例は、やや時期が遡るが18世紀後葉の史料に確認することができる。1768(乾隆33)年、首里王府の名で在番・頭に布達された文書「与世山親方八重山島規模帳」には、「小浜村より高那村^江寄百姓いたし候者共、小浜村^二所持為致芋敷之儀、小浜村之百姓中^江引渡管候処、今迄持通之筋仕候由不宜候間、右芋敷之儀小浜村百姓中^江可引渡事」(石垣市総務部市史編集室編1992: 53)とある。これによると、西表島北東部に位置する高那に寄百姓した旧小浜村民が、今も小浜島にある芋畑を所持しているのは良くないとし、小浜村の百姓たちにこれを引き渡すこととしている。このように、在地にある村落の耕作権がある面において優先していたことがうかがえる。

ところで、隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」は、降水が直接地下に浸透しやすく

(小林 1996b: 166), 水資源の慢性的な欠乏は, 生活するうえで大きな問題だった。そのため, 鳩間島では家単位で順番に水をくむといった井戸利用のルールがあった(大城 2011: 36-40)。とはいえ, 干ばつが続くと水の出が悪くなるため, 「高い島」からの輸送に頼った²⁸⁾。この鳩間島からの通耕の事例で特筆すべきことは, 水を得るための「池沼」を村持ち, すなわち, 共同で所有していたことであろう。1903(明治 36)年, 鳩間村は, ①〔上原/伊武田/1332 番〕, ②〔上原/伊武田/1375 番〕の 2 箇所を村持ちの「池沼」として登記している【土地台帳】。また, 「池沼」以外に, 鳩間村は“インタ牧”〔上原/伊武田/1331 番〕を所有し【土地台帳】, 1897(明治 24)年の調査によると, 牛 48 頭を飼育していた(小野編纂 1932: 254)。これらの牛は, 踏耕にも用いた²⁹⁾。踏耕とは, 何頭もの牛や馬を, 水を入れた田に追い込んで踏ませ, 水田の土を柔らかくし, 床締めをする作業のこと——農学者の渡部はオーストロネシア *Austronesian* 型の技術ととらえている——である(渡部 1990: 392)。「低い島」の住民は, 水稲耕作のために牛を飼養する必要があったのである。これらの作業の合間には, 近辺のマングローブ林に生息していたミレナシジミ *Geloina coaxans* やミナミテナガエビ *Macrobrachium formosense*, 海岸の干潟に生息するテナガダコ *Octopus minor* などのタコ類を調達し, 田小屋で調理したという。また, アノフェレス蚊を避けるために, 田小屋では, 「高い島」に生育するタブノキの樹皮を乾燥させたものを燻していた。

前節に引き続き本節では, 1900 年前後における具体的な通耕の様相を記述してきた。先述したように, 18 世紀初頭当時の「低い島」の住民は, 基本的に「高い島」の住民の耕地近辺にある空き地を借地し, 小規模な通耕を行っていた。しかしながら, 「低い島」の環境収容力を上回ってきた過剰人口に対処するためには, 居住ニッチ(生態学的ゾーン)外の生態資源をより積極的に獲得する必要があった。そのため, 在地村落との軋轢によって分散的に開墾(広域分散型)せざるをえなかったり, “センゴクタバル”——地租改正時, ほぼすべての耕地が「低い島」の住民の所有地であったことは, 未開の地を新たに開いたと予想される(図 5)——の開墾(狭域集中型)に挑んだのである。いずれにせよ, 結果的にこれらの開墾が在地村落との衝突を避けるための空間的なすみわけをもたらし, 土地への継続的な働きかけが 20 世紀初頭の土地所有権の成立につながる, 「低い島」の住民による「高い島」の土地・資源利用の正当性を育んでいったのである。

本章では, 「低い島」のうち新城島と鳩間島を取り上げたが, ここで他の「低い島」との差異について言及する。図 1 にあるように, 八重山諸島には他に竹富島や黒島,

表6 「低い島」における田畑物産（1892年）

	面積 (km ²)	人口密度 (人/km ²)	耕地(歩)		農産収穫物(石)		家畜(頭) ヤギ
			田	畑	米	粟	
鳩間村	1.0	169.8	195,615	353,319	92	—	2
新城村	(上地島) 1.8	68.6	135,629	378,927	96	54	12
	(下地島) 1.6						
竹富村	5.4	176.4	18,810	1,668,626	13	247	95
黒島村	10.0	58.4	25,003	1,608,729	18	291	136

本稿の取り上げた新城島・鳩間島以外の「低い島」も小規模であるが必要に応じて通耕を行ってきた。これを跡付ける政策である首里王府による柚山分割——管理主体を村とする林野改革——は、八重山諸島の「低い島」の柚山を西表島の中に設定している（得能 2007: 55-58）。「沖縄県八重山嶋統計一覽略表」（沖縄県八重山嶋役所 1894）により作成。

表7 船浦（図6のZ地点）の土地所有権の移転動向

地番	地目	反別反 (歩)	変更履歴				地番	地目	反別反 (歩)	変更履歴			
			所有買取主住所	西暦	事故					所有買取主住所	西暦	事故	
956	田	1,427	上原 → 鳩間	1910	所有権移転	969	原野	1,924	上原 → 鳩間	1915	転居		
957	田	515	上原 → 鳩間	1914	所有権移転	970	田	1,807	高那 → 鳩間	1914	所有権移転		
958	田	1,602	上原 → 鳩間	1910	所有権移転	971	田	111	上原 → 鳩間	1910	転居		
959	田	809	上原 → 鳩間	1909	転居	972	田	425	上原 → 鳩間	1914	所有権移転		
960	田	211	上原 → 鳩間	1912	所有権移転	973	田	624	上原 → 鳩間	1914	所有権移転		
961	田	1,929	上原 → 鳩間	1912	所有権移転	974	田	606	上原 → 鳩間	1919	転居		
962	田	1,722	上原 → 鳩間	1912	所有権移転	975	田	104	上原 → 西表	1909	所有権移転		
963	田	1,023	上原 → 鳩間	1912	所有権移転	976	田	203	上原 → 大蔵省	1908	未詳		
964	田	526	上原 → 鳩間	1912	所有権移転	977	田	119	上原 → 鳩間	1914	所有権移転		
965	田	707	上原 → 大蔵省	1908	未詳	978	田	206	上原 → 鳩間	1914	所有権移転		
966	田	611	上原 → 鳩間	1919	転居	979	田	106	上原 → 鳩間	1912	所有権移転		
967	田	414	上原 → 鳩間	1919	転居	980	田	329	上原 → 鳩間	1912	所有権移転		
968	田	924	上原 → 鳩間	1914	所有権移転	981	田	28	上原 → 鳩間	1910	転居		

1909（明治42）年、上原村民10戸75名が鳩間島へ移住し（高桑 1982: 162）、大正末期には上原村は廃村した。そのため、上原村の耕作地の所有権は、鳩間村民へ移転、もしくは旧上原村民による鳩間島からの通耕といった形態に変化した。図6のa域も、通耕の対象地になった。（土地台帳により作成）。

波照間島という「低い島」がある。石西礁湖の外側に位置する波照間島は、外海の孤島のため日常的に往来することが難しく、一戸あたりの剝船所有割合は5.6%に過ぎない。一方、竹富島や黒島などの自島内にある程度の耕地が確保できる「低い島」は、畑作の卓越した島であった（表6）。例えば、1892年当時の統計（沖縄県八重山嶋役所 1894）によると、竹富村と黒島村で飼育されているヤギ *Capra hircus* の頭数が八重山諸島の村落の中で突出しているのは、ヤギの厩肥を常畑に施肥する技術を発達させていたからである（安溪 1998b: 82-83）。これらの「低い島」に比べると、新城島や鳩間島の面積は2.0 km²弱であり、島内の“アリバタ〔荒蕪せる畑〕”の耕地は

限られていた。くわえて、「高い島」への距離が相対的に近いという条件下にあった。これらが通耕の発生とその成長を後押しする重要な要因となったといえる。

最後に、その後の展開を紹介すると、「高い島」の衰退した村落の住民は、20世紀初頭にはマラリアの心配のない「低い島」へ移住し、在地村落は廃村した。そのため、移住した旧住民は、「低い島」の住民に耕地を売却、もしくは転居先からの通耕というかたちをとったため、この往来現象はさらに拡大することになった(表7)。しかしながら、興隆していた通耕も20世紀中葉には、西表島におけるマラリアの撲滅や沖縄県道215号白浜南風見線の敷設に伴う耕地の売却、卓越した操舟術を背景とした換金性の高いカツオ漁への進出、急速な過疎化の進行、1971(昭和46)年の長期大干ばつや大型台風28号の来襲などの度重なった天災、1972(昭和47)年の日本復帰に伴う水稲生産調整政策などによって、衰退していくことになった(浮田1974)。

4.4 海域世界における“水平統御 *Horizontal Control*”

これまで、八重山諸島における通耕実践の具体的様相を、土地台帳とそれに付随する地籍図を中心的な史料とし記述してきた。狭域集中型／広域分散型という面的には対照的な通耕形態であるが、ふたつの事例に共通して、「低い島」の住民は、自然環境及び利用できる生態資源の偏在に対応するために、「高い島」において水稲耕作のための水田だけではなく、共同牧場や柚山、畑、そして、水資源の不足を補うための「池沼」や「宅地」などの各種地目を共同で所有し、利用してきたことをあきらかにした。この知見は、少なくともこの往来が“通り耕す”という水稲耕作のみに限定される営みではないことを明示しているといえる。

これらの各種地目を所有しつつ、イノシシなどによる獣害を防ぐための猪垣の共同築造や、近隣の農地に被害を出してきた放牧的な共同牧場の石垣築造など、通耕先の村落との関係において「低い島」の住民たちは、村落としての対応を求められている。くわえて「低い島」には生息していないリュウキュウイノシシを対象に猟をし——これは害獣の駆除と動物性タンパク質の摂取とを主目的とする——、モッコク *Ternstroemia gymnanthera* (Wight et Arn.) Bedd. などの柱や梁材として有用な木材や、三線の棹に用いるヤエヤマコクタン *Diospyros ferrea* auct. non (Willd.) Bakh., 床材やざる及び食用に利用する竹類、ロープ材としてのかずら類などの採取や、タブノキの香皮はぎなどを行ったという(今井1980; 山口1992a)。また、土地所有という側面では表面化しないが、「高い島」の珊瑚礁域に生育するマクリ *Digenea simplex* (Wulfen) C.

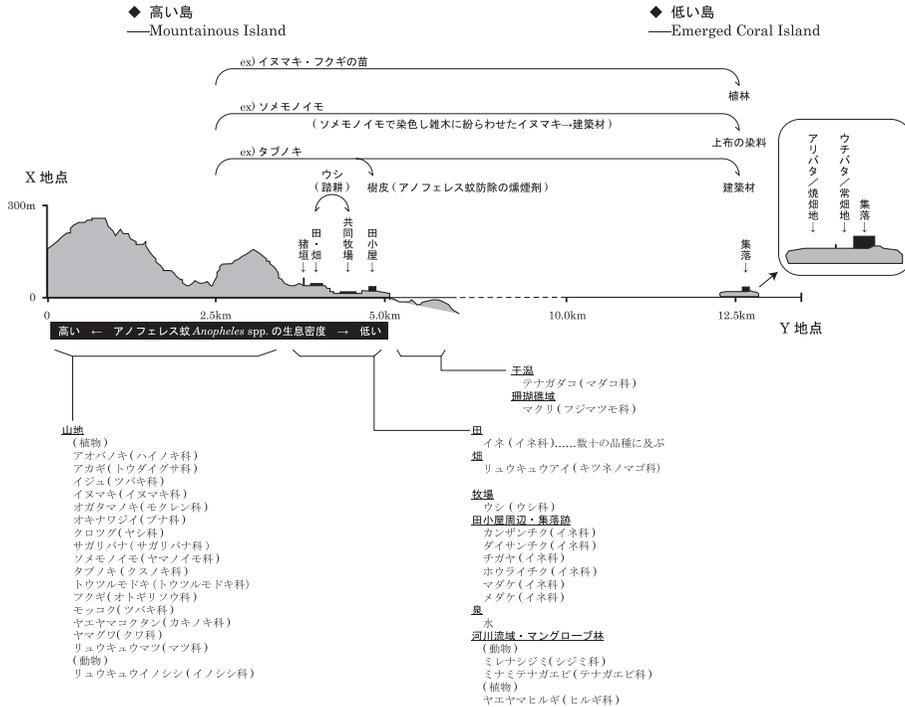


図8 生態資源利用にみる水平構造
 国土地理院発行の50mDEMを使用し、図2におけるX地点からY地点までの断面図を作成した。なお、利用する生態資源のうち植物項目の一部は、山口(1992a: 238)を参照した。

Agardh などの採取なども行っていた。図8は、「低い島」の住民による多岐にわたる資源利用を図示したものである。

このような日常生活の中に埋め込まれた種々の実践は、先行研究で述べられてきた納税用の米に焦点を絞った通耕実践という理解が不十分であることを示している。すなわち、通耕という概念を農事に限定してしまうと、「高い島」と「低い島」との往来実践を局所的にとらえることになる。そのため、従来の通耕という概念をより拡大させて、森林資源や飲料水などの生態資源の獲得といった行為を含めて使用する必要がある。この往来は、交易などを介した生活物資の補完とは異なり、生活システムそのものを構成しているのである。通耕の産物のひとつとしての米は、確かに多くの政策と強く結びついてはいるが、それはあくまでこの海域に面として広がる資源利用のあり方のごく一部をとらえたものに過ぎないのである。

その意味において、本稿の事例は、中央アンデスにおける異なる生態学的階床

ecological floors を同時的かつ最大限に利用する“垂直統御 *Vertical Control*” (ムラ, J. V. 1999; 大貫 1979; 山本 1980) の構造と対比させていえば, 海域世界における“水平統御 *Horizontal Control*” の構造といえる。ただし, 垂直統御のモデルを提唱した文化人類学者のムラ, J. V. (1916 ~ 2006) の主眼は, 中央アンデスにおける①垂直方向に分布する生態資源の利用方法の確立と, ②生産・流通を統御する政体——チャビン・ワリ・インカなどの広域を統一した文明 *horizon*——の形成との関わりにあったという (稲村 2000: 262–264; 關 2007: 210)。本稿にとって示唆的なのは, このムラの視角が生態資源利用の確立と統治機構の形成や権力側の政策との包括的な絡み合いの把握を目的とし, 垂直統御という概念を構想したところにある。ひるがえって, 本稿で論じた八重山諸島における通耕は, この海域世界を統治してきた首里王府やその施策と過剰に関わらせた見方が中心となってきた (千葉 1972; 浮田 1974)。すなわち, この往來を統治機構による強権的な貢租収奪という制度設計の枠内で把握してきたといえる。しかしながら, 本稿の事例に即して考えると, 海域世界における通耕は, 首里王府の政策にそのすべてが起因するのではなく——たとえ政治権力が通耕で得られた穀物のほぼすべてを収奪しようとも——, 「低い島」の住民による慣習化されていた水平構造の生態資源利用を首里王府が後追いで承認したものであり, 生態資源利用と政体とのせめぎ合いとして統合的に把握されるべきである。

例えば, 首里王府のちぐはぐで稚拙な政策は, この水平構造の生態資源利用のモデルをより活発に利用するという方向には向かなかった。その証左として, 首里王府がこの往來に対する支援策を施したことは管見の限りなかった。むしろ, 18世紀を通して, 首里王府は, 「低い島」から「高い島」へ住民を移住させる「寄百姓」をかなり強力に推し進めてきた。この政策は, 人口の少ない地域に新村を建設し, 農産増強・人口調整を図ったものである。しかし, 新設村落の大半は, その後しばしば住民を補充したにもかかわらず, この政策を撤回した半世紀後には, ほとんどの村落がマラリアによって廃滅に帰したのである (千葉 1972: 462)。この首里王府の失策は, 八重山諸島における固有の生態史の中で成立してきた水平構造の生態資源利用の形態を軽視したことに起因している。その意味において, 租税制のためにやむをえずマラリアの猖獗する「高い島」へ往來してきたという税制史観は, 政治権力による収奪のその強権性のみを過大にとらえた一面的なものに過ぎないといえる。

最後に, 文化人類学者のギアーツ, C. (1926 ~ 2006) の生態類型の指標 (ギアーツ, C. 2001) を参照しつつ, Alkire, W. H. (1978) の「低い島」を舞台とした社会変動と適応過程モデルを基に海域世界における水平統御モデルの精緻化を図りたい。ギア

ツは、文化と環境を分離せずにシステム内部のダイナミクスを問う文化生態学の方法を利用し、島嶼部東南アジアに位置する「内インドネシア」にみられる棚田 *Sawah* と「外インドネシア」にみられる焼畑 *Swidden* という対照的な土地利用様式を、サワエコシステム *Sawah Ecosystem* と焼畑エコシステム *Swidden Ecosystem* というふたつの“生態系 *Ecosystem*”としてとらえた（ギアーツ, C. 2001: 52-77）。

このふたつの類型の特徴は、以下のようにまとめることができる。サワエコシステムは、水の運ぶ無機物を養分として摂取し、システムの維持は人工の灌漑設備に依存している。著しい安定性と耐久性をもち、連作による収穫の減量もない。また、人口増加に対して集中的で膨張的な反応、すなわち、労働集約化によって対応できる、という性質をもっている。他方、焼畑エコシステムは、土壌中に蓄えられない養分は動植物間において循環し、システムの維持は過度の雨量や日光から土壌を保護する熱帯

表 8 八重山諸島における水平統御の成立

	高い島 西表島	低い島 新城島、鳩間島
エコシステム		
① 栽培形態	α-1) 水稻栽培中心	β-1) 多種の畑作物栽培に多様化
② 養分の供給形態	α-2) 水の運ぶ無機物に依存	β-2) 石灰質土壌中に蓄えられず動植物間において循環 β-2) 豚糞尿や灰などの施肥
③ システムの維持	α-3) 人工の灌漑設備や踏耕に依存 α-3) イノシシ防除の猪垣や猟用犬に依存	β-3) 天水に依存(干ばつの影響を受けやすい) β-3) 防風機能をもった珊瑚の乱積み
④ システムの均衡性	α-4) 安定・耐久的	β-4) 脆弱——致的な耕作地
人口圧 (1892年時) 【人口密度(人 / km ²)】	真空【4】	高压【91】
生態環境		
生態資源	多	少
水文環境	河川系	地下水系
☞アノフェレス蚊	生息	非生息
植物相	照葉樹林etc. (ブナ科樹木の優占) ——イノシシに大量の堅果を供給	灌木・灌木etc. ——乾燥と人為的干渉(焼畑)による
☞リュウキュウイノシシ	生息	非生息
【過剰人口の受容過程】	増加する相互交渉 ex) 周期的な開発 交換経済 ——卓越した操舟術の発達—— (在地村落との争いや協同を経て)	
	☞ 水平統御の成立 居住ニッチ(生態学的ゾーン)外の生態資源の獲得	

ギアーツ, C. (2001: 52-77) の生態類型の指標を参照しつつ, Alkire, W. H. (1978: 93, 110, 135) の「低い島」を舞台とした社会変動と適応過程モデル〔① *Isolate system* (孤立タイプ), ② *Cluster system* (集合タイプ), ③ *Complex system* (複合タイプ)〕を基に作成した。本稿の取り上げた「低い島」である新城島や鳩間島の生活戦略は, Alkire, W. H. が② *Cluster system* に分類したプカプカ環礁とナサウとの往来関係(注30参照)に近似している。また, 「低い島」の住民は, 地域独自の特産品を産出・交易することによって生活を組み立ててきた(注3参照)。その意味において, 本稿の事例は, 中央カロリン諸島やマーシャル諸島を舞台とした③ *Complex system*——本稿でいう交易モデル——と, ② *Cluster system* とが組み合わさったモデルといえる。一方, 施肥技術を発達させた「低い島」である竹富島や黒島の生活戦略は, 開墾の推進及び特別な技術を発達させる① *Isolate system* に便宜的に分類できる。

雨林の働きに依存している。そのため、システムの均衡は極めて脆弱であり、人口増加に対して柔軟性を欠いた人口分散的な対応しかできない、という性質をもっている。そうして、オランダによる植民地統治（カルチャーシステム〔強制栽培制度〕や法人プランテーション・システムなど）の下で起こった人口爆発に対して、内インドネシアでは、既存の灌漑施設を改良し、棚田への労働投下量を増やし、技術・組織・制度を細部にわたって精密化させることによって対応してきたと指摘する。ギアーツは、この過剰人口の受容過程を“インボリューション *Agricultural Involution*”と呼んでいる。

一方、本稿の取り上げた隆起珊瑚礁を基盤とした「低い島」におけるエコシステム *Lowland Ecosystem* の特徴は、石灰質土壌中に蓄えられない養分は動植物間において循環し、もしくは豚糞尿や灰などの施肥により、システムの維持は天水や防風機能をもった珊瑚の乱積みに依存しているところにある。この地下水系かつ狭隘な耕作地の「低い島」では、サワエコシステムのような労働集約化や焼畑エコシステムのような人口分散的な対応も見込めなかった。そのため、高圧な人口過剰に対して「低い島」の住民は、「高い島」の生態環境を自らの生活領域の中に組み込むことによって対応してきた。表8は、Alkire, W. H. (1978: 93, 110, 135) の「低い島」を舞台とした社会変動と適応過程モデルを参照し作成したものであるが、本稿は、この類型間を繋いだ生活システムを環境収容力の面的拡張を目的とした海域世界にみる水平統御と規定したい³⁰⁾。ギアーツのいうインボリューションを内包的な対応とすれば、本稿のいう水平統御は、操舟技術を基盤とした外延的な対応である。

文化生態学を批判的に継承したギアーツの枠組みは、個別の生態類型における内的ダイナミクスを描き出したものである。しかし、本稿の対象とするような海域世界では、そこで展開してきた生態史を生態類型の自己完結的な内部ダイナミクスとしてとらえることは難しい (Alkire, W. H. 1978: 94–111; 須藤 1989: 298–303; 近森・塩崎 2008)。その意味において、本稿の提出した操舟技術を基盤とした水平統御というモデルは、海域世界における生態史を構想するうえで重要な契機になると考えられる。

5 おわりに——海域世界にみる「海上の道」

本稿は、「低い島」の住民が「高い島」において所有してきた各種地目の記述・分析を通して、ここにみられた往来が「低い島」の日常生活に埋め込まれた生態資源をめぐる空間実践（環境収容力の拡張）であることをあきらかにした。

最初に紹介した「琉球新報」の記事内容と同様に、宮良當整は、1900（明治33）年の旧暦10月29日の日誌に「当村民ノ舟乗術ノ達者、且気性ノ強キコト目ヲ振テ驚クバシ」（竹富町史編集委員会町史編集室編2006:260）と、翌年には「前記ノ如キ風波ニテ航海スルトハ夫程舟乗ノ術巧ヲ得タルニアラサレハ果シ能ハス、当村民ノ其術ノ妙ヲ得タルハ実ニ感警スルニ余アリ」（竹富町史編集委員会町史編集室編2006:528）と、両日ともに猛烈な波浪の中で伝間船を操って帰島した島民らに感嘆している。

先に述べたように、「高い島」と「低い島」とを往来する交易実践は、基本的に「低い島」の住民による往来であって、生態資源の乏しい環境で居住するための生活戦略のひとつであった。そのため、「低い島」の住民は、例えば、中央カロリン諸島のスター・コンパス *Star Compass* やマーシャル諸島のスティックチャート *Stick Chart* などの航海に関する知識及び技術である“ウェイファインディング *Wayfinding*”を育んできた（牛島1977:153–154）。

これらと同じくして、通耕と操舟の技術とは、歴史的に併行し成長してきたのであろう。本稿の対象とした海域世界では、卓越した操舟術を培いつつ、自然環境及び利用できる生態資源の偏在に対応し、農耕民の往来する“海上の道”をかたちづくってきたのである。

謝 辞

現地調査にあたっては、「低い島」での暮らしについて身を以て示していただいた安里弘康さんをはじめ、竹富町の皆様や史料閲覧などのご高配をいただいた竹富町役場の税務課の方々には、長期にわたり多大なご教示をいただきました。審査の過程で、懇切かつ有益なコメントをいただいた査読者の方々と併せて、厚くお礼申し上げます。

執筆にあたっては、早稲田大学人間科学学術院の蔵持不三也先生、矢野敬生先生、渡部圭一氏のご指導を受けました。なお、本研究の骨子は、日本地理学会春季学術大会（2011年3月、明治大学）、日本文化人類学会第47回研究大会（2013年6月、慶應義塾大学）にて発表した。

注

- 1) 北東アフガニスタンのパシュトゥーン遊牧民は、ふたつの牧野を低地と高地とにもって、規則的に一年に一往復をしたという（松井2001）。ヨーロッパのバルカン半島においても同様な形態があり（小林1974）、夏季には冷涼な高地へ、冬季には温暖な低地へ保有する家畜を移動させる“トランスヒューマンス *transhumance*”は、ふたつの生態系を往来する典型的な生活形態である。
- 2) 中央アンデスでは、家畜であるリヤマなどは高地で飼養し、低地の畑でトウモロコシを栽培した。リヤマは、これらの農作物の輸送・運搬を担った（稲村1996:196）。
- 3) 本稿の対象とする八重山諸島には、「高い島」と「低い島」という島嶼類型の二分法に対

応する民俗呼称があり(表1)、当該地域においては、痩せた水田の肥料となったソテツの葉の灰を重宝した「高い島」の住民が「低い島」の灰と稲束とを交換することがあったという(安溪1988)。また、「低い島」の新城島では、17世紀から19世紀中葉まで焼成されていたパナリ焼という交易品があった。新城島の特産であったこの土器は、砂混じりの粘土に、カタツムリや貝殻をつぶしたものを混合し手ひねりで成形し、タブノキヤスナヅル *Cassythafiliformis* L. の樹液を塗って天日で乾かし、弱火で焼成して作られる(安里1976: 58-59)。この土器は、八重山諸島各地で、鍋、水がめ、墓や床の間、仏壇に供える香炉、骨つばなど様々な用途に用いられた。このように、「低い島」の住民は、この地域独自の通耕という生活形態の他に、特産品を産出・交易することによって生活を組み立ててきた。しかしながら、19世紀から20世紀初頭にかけて化学肥料や陶器などの新しい技術製品が浸透・普及し、これらの交易形態は自ずと衰退した。

- 4) 『石垣市史叢書—9 参遺状抜書 下巻』(石垣市総務部市史編集室編1995b: 6-13) 所収。
- 5) 「立」は誤記であり、正しくは「毛」。
- 6) この『李朝實録』所収の記録は、伊波普猷(1876-1947)の紹介を先鞭にし、数々の分析が試みられてきた(伊波1927; 浮田1974; 佐々木1978; 小林1984, 1996b)。済州島の金非衣、姜茂、李正らによるこの漂流録は、記録の詳細さもさることながら、先島諸島における最古の文献記録として重宝されている。この史料は「言所歴諸島風俗甚奇異、上令弘文館書其言以啓」(日本史料集成編纂会編1979: 961)とあり、本国にまで移送された後に、經由してきた島嶼の「奇異な」風俗を証言録として記録したものである。この漂流録のもっている情報は、島嶼ごとの特徴を描いた“エスノグラフィー”として様々な読み取りができる。例えば、先島諸島を中心とするイネ栽培の分布情報(小林1984, 1996b)、農耕に関する技術と食事文化(佐々木1978)、琉球から本国への漂流者の保護・送還体制、牛や鶏などの家畜飼養の有無(伊波1927)——この漂流記によると、当時の先島諸島では、豚は飼育されていない——、米や森林資源、鉄器などの島嶼間交易の情報(得能2007: 37-43)、先島諸島におけるヤマノイモ栽培の卓越の問題(佐々木2003: 83-84)、服飾・装身具などの記述を基にした比較民族的な検討などの分析がある。
- 7) ただし、この「稻米」に対して用いられた「貿易」という言葉使いは誤りであり、この「稻米」に関する移入は、遠距離通耕によるものであるとする指摘もなされている(小林2003: 148; 得能2007: 41-43)。
- 8) 水納島は、多良間島の北約8.0 kmに位置する。昭和の初期頃まで、水納島民の獲った魚と多良間島民の栽培したイモとは交換の対象となっていた(多良間村史編集委員会編1993: 60)。
- 9) 「高い島」を抱える八重山諸島の島影は、多良間島からもよく見通すことができる。
- 10) 『平良市史—第3巻 資料編1 前近代』(平良市史編さん委員会編1981: 57-62) 所収。
- 11) 「多良間島之儀、三月十日大波揚、人民諸物被引流、其上小虫出来及飢、宮古より連々飢米積渡漸相暮来候処、冬向相成、彼島より^渡渡海無之、餓死仕者多々有之候付、人程八重山島^差差渡せ候ハ、助命被下度、多良間役人より飛舟を以罷渡候、十二月二楫立舟式艘より男女老若式百貳拾七人、若文字志喜屋にや・与那覇にや宰領ニ^乗乗渡、上納米より老人ニ^日日二四合先ツ、相渡、根氣付^{次第村々}□□□□^{配分}ニ^口口持させ、次辰二月十日帰帆させ候也」(石垣市総務部市史編集室編1999: 86)。なお、この記事は“多良間田”の由来を説いたものであり、18世紀中葉の時点で伝承となっている。ちなみに、八重山諸島の中で新城島の方言は特異で、多良間島のもの極めて酷似しているという(牧野1972: 126, 164-165)。
- 12) 1899(明治32)年の『細菌学雑誌』に掲載された守屋伍造・遠藤芳蔵の「八重山島風土病研究報告」によると、「有病地ノ住民ハ風土病ヲ畏怖スルノ念予想外ニ輕キガ如シ。之レ彼等ハ到底避クベカラザルノ災タルヲ覚悟シ更ラニ意ヲ注ガサルニ因ルナラン」(石垣市総務部市史編集室編1989: 285)と報告されている。
- 13) 「問フ地方病ノ患者ノ有無如何例ニ依リ之レ無シト、答フ予曩キニ遊歩シテ數人ヲ見タリ如何ト詰レハ唯頓首スルノミ余怪ニ耐ヘス、筆談ヲ始メ云フ連年人口減少シ租税ノ負擔重シ實ニ人民ノ艱苦憫ム可シ、此地ニ長タル人ハ爾後何ヲ以テ此急ヲ救ハントスルヤ」(笹森1894: 152-153, 読点は著者)。
- 14) この記事の日付は、7月19日である。
- 15) 「八重山島管内西表嶋仲間村巡檢統計誌」によると、1885(明治18)年当時、「萬木屋」には、51歳の萬木コヤマと他1名、「石垣屋」には、41歳の石垣真勢と他2名がいたようである。

- 16) 19世紀後半の宮良間切の頭（宮良親雲上）は、西表島の仲間村において黒島・竹富・新城の「百姓等所持のあい畠」を検分している（得能 2007: 88）。なお、「頭役被仰付候以来日記」は、琉球大学附属図書館宮良殿内文庫に所蔵されている。
- 17) 『八重山年来記』の1734（雍正12）年の記事には、「波照間村ノ義、人居到繁栄、最早千四百七拾人余罷成、作場狭ク有之候間、古見島ノ内南風見江申所^江人数四百人余差分村立仕度、波照間村百姓等ノ内申出候付、村立南風見^与唱、与人耆人、目差耆人新規ニ被召立候事」（石垣市総務部市史編集室編 1999: 59）とある。この南風見村の創立に関しては、『参遣状拔書』（石垣市総務部市史編集室編 1995a: 93-96）に詳しい。
- 18) 『南島探験』に折り込まれた「八重山群島畧圖」には、「新城島牧」として記されている。
- 19) 1903（明治36）年当時、西表島南東部には、①以外に、②〔南風見/ムラボカ/187番（1,627）/古見村〕、③〔南風見仲/屋敷/33番（608,306）/仲間村〕、④〔南風見仲/ヨコイダ/35番（438,819）/宮良間切古見村〕の4箇所が「牧場」として登記されている。
- 20) 隣接した牧場の牛が新城村の牧場に紛れ込むことがあり、牛の両耳にこれを所有する村と家とを特定できる印をつけて区別できるようにしていた（安里 1976: 67-68）。
- 21) 1904（明治37）年10月に、この田小屋の位置していた「宅地」は、連名での個人登記に変更されている。①の田小屋の「所有質取主氏名」は、新城島のうち上地の代表者である本底保久利・宮城加那に、②と③の田小屋の「所有質取主氏名」は、下地の代表者である大嵩真佐利・宇立佐阿屋に変更された。
- 22) 地租改正前、大保良田は“ウハラダ〔大原田〕”と呼ばれていた（喜舎場 1967: 225）。聞き書きによると、“セングクタバル”と呼びうる大規模な耕作地は、石垣島の名蔵、西表島の祖納（仲良田 or 美田良）・古見（与那良田原）・南風見（大保良田）の4箇所にあった。なかでも、古見の“ヨナラタバル〔与那良田原〕”は、琉球諸島の中でもっとも大規模な耕作地であった。
- 23) 大浜（1971: 60）によると、浦内村は1893（明治26）年に廢村とされている。
- 24) 「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」によると、1885（明治18）年当時、西表島に位置する鳩間村民の耕作地として、伊武田の中に「サギンタ原」、「ヨシキイラ原」、「トマタ原」、「インタ原」、「小浦原」、「ナカシ原」、「ナカタ原」などの名称がある。また、小濱（1996: 25）の「西表島北岸（パイタ）の微細地名」を確認しても、西表島北部の耕地分散性を明瞭に読み取ることができる。
- 25) 「鳩間ユンタ」も「鳩間節」と同様の内容をもっている（喜舎場 1970: 400-409）。また、同じく通耕に関連する古謡としては、竹富村から仲間村へ移住した小山真栄のことを謡った「まごかい節」（喜舎場 1924: 52-54）などがある。
- 26) ところで、この古謡の中には、稲のみでなく粟のことも謡われている。1892年、鳩間村は、米92石に対して粟の収穫高は記録されていない（沖縄縣八重山嶋役所 1894）。しかし、「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」によると、遡ること1885（明治18）年当時、米70石に対して粟10石の収穫高が記録されている。ここに、鳩間村における粟栽培の最晩年を知る事ができる。
- 27) 「アデンガー」は、檜の木の実のこと。「ミシ」は、神酒のこと。
- 28) 1927（昭和2）年の「八重山新報」（1月21日）の鳩間島に関する記事では、西表島から汲んできた水は、「石油罐」に1杯10銭くらいで売買しているとある。『竹富町史—第11巻 資料編 新聞集成 II』（竹富町史編集委員会町史編集室編 1995: 337-338）所収。
- 29) 聞き書きによると、牛を所有していない個人は、放牧されていた牛を何頭か捕まえて、水田を踏ませることもあったそうである。また、これは昭和16年頃の「低い島」である竹富島から西表島への通耕の話であるが、「踏耕」のために共同で黒牛を購入し、普段は通耕先のヨツン（西表島の北東部）の東側にあった茅葺の掘っ立て小屋に住んでいた古老に預けていたそうである。
- 30) 近森・塩崎の論文（2008）は、ポリネシアのクック諸島・ブカブカ環礁を事例地にし、非常に興味深い指摘をしている。「低い島」のブカブカ環礁は、面積3.6km²ほどの島内で、タロイモとココヤシとを栽培し漁撈を営んできた。そして、この環礁の南東約90kmに、ナサウという面積1.2km²ほどの「低い島」が位置し、ブカブカ島民共有の慣習的な保有地“モツ Motu”になっていたという。本稿にとって参考となるのは、この島嶼間の往来を「低い島」における環境収容力の拡張ととらえているところにある。すなわち、伝統的な首長制社会組織を深化させつつ、“モツ”であるナサウにおいて、貴重な現金収入源となったコブラ Copra—ココヤシの果実の胚乳を乾燥させたもの—を集約的に生産し、商品経済の浸透

に対応することによって、ブカプカ環礁の過剰人口を支持していたという (Alkire, W. H. 1978: 86-90)。

文 献

秋道智彌

1995 『海洋民族学—海のナチュラリストたち』東京：東京大学出版会。

2000 「第7章 オセアニアの地域史」大貫良夫・川田順造編『地域の世界史4 生態の地域史』, pp. 268-309, 東京：山川出版社。

安里武信

1976 『新城島 (パナリ)』私製。

安溪遊地

1978 「西表島の稲作：自然・ヒト・イネ—伝統的生業とその変容をめぐる」『季刊人類学』9(3): 27-101。

1988 「高い島と低い島の交流—大正期八重山の稲束と灰の物々交換」『民族学研究』53(1): 1-30。

1998a 「西表島の焼畑—島びとの語りによる復元研究をめざして」『沖繩文化』88 40-69。

1998b 「西表島の焼畑 第二部—生態的諸条件とその歴史の変遷をめぐる」『沖繩文化』89: 67-95。

石垣市総務部市史編集室編

1989 『石垣市史—資料編 近代3 マラリア資料集成』沖繩：石垣市役所。

1992 『石垣市史叢書2 与世山親方八重山島規模帳』沖繩：石垣市役所。

1995a 『石垣市史叢書8 参遣状抜書 上巻』沖繩：石垣市役所。

1995b 『石垣市史叢書9 参遣状抜書 下巻』沖繩：石垣市役所。

1999 『石垣市史叢書13 八重山島年来記』沖繩：石垣市役所。

稲村哲也

1996 「アンデスとヒマラヤの牧畜—高地適応型牧畜の家畜移動とその類型化の試み」『Tropics/熱帯研究』5(3): 185-211。

2000 「アンデス山脈とヒマラヤ・チベット山塊」大貫良夫・川田順造編『地域の世界史4 生態の地域史』, pp. 214-267, 東京：山川出版社。

伊波普猷

1927 「朝鮮人の漂流記に現れた尚眞王即位当時の南島」『史學雑誌』38(12): 44-84。

今井一郎

1980 「八重山群島西表島におけるイノシシ猟の生態人類学的研究」『民族学研究』45(1): 1-31。

印東道子

1994 「オセアニアの島嶼環境と人間居住」『Tropics/熱帯研究』3(1): 87-108。

2007a 「生態資源の利用と象徴化」内堀基光編『資源人類学01 資源と人間』, pp. 183-208, 東京：弘文堂。

2007b 「序—生態資源と象徴化」印東道子編『資源人類学07 生態資源と象徴化』, pp. 13-23, 東京：弘文堂。

浮田典良

1974 「八重山諸島における遠距離通耕」『地理学評論』47(8): 511-524。

牛島 巖

1977 「火山島と珊瑚礁 (人間生態学的に)」石川榮吉編『世界地誌ゼミナール VIII オセアニア』, pp. 150-163, 東京：大明堂。

1987 『ヤップ島の社会と交換』東京：弘文堂。

梅木哲人

2000 「古文書による八重山の基礎的研究」法政大学沖繩文化研究所沖繩八重山調査委員会『沖繩八重山の研究』, pp. 11-51, 東京：相模書房。

蛭原一平

2009 「沖繩八重山地方における猪垣築造の社会的背景」『歴史地理学』51(3): 44-61。

- 大城公男
2011 『琉球叢書 25 八重山 鳩間島民俗誌』 沖縄：榕樹書林。
- 大貫良夫
1979 「アンデス高地の環境利用—垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』 3(4): 709-733。
- 大浜信賢
1971 『八重山の人頭税』 東京：三一書房。
- 沖縄縣八重山嶋役所
1894 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略表」 東京國文社。
- 小野武夫編纂
1932 『近世地方經濟史料 第十卷』 東京：近世地方經濟史料刊行會。
- 風間計博
2006 「環礁生態系における植物利用システムの再編成—サンゴ島の生業經濟と換金作物栽培」 印東道子編 『環境と資源利用の人類学—西太平洋諸島の生活と文化』, pp. 61-83, 東京：明石書店。
- 柄木田康之
2006 「島嶼間交易における集権化と分権化—サウエイ交易をめぐる論争」 印東道子編 『環境と資源利用の人類学—西太平洋諸島の生活と文化』, pp. 241-263, 東京：明石書店。
- 川喜田二郎
1961 「ネパール・ヒマラヤにおける 2, 3 の生態学的觀察—トルボ民族誌, その 3」『民族學研究』 25(4): 1-42。
1977 「中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造—生態学的・文化史的・發展段階的の 3 観点を総合しての展望」『季刊人類学』 8(1): 3-80。
- 川崎晃稔
1991 『日本丸木舟の研究』 東京：法政大学出版局。
- ギアーツ, C.
2001 『インボリユーション—内に向かう發展』 池本幸生訳, 東京：NTT 出版。(Geertz, C. 1963 *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.)
- 喜喜場永珣
1924 『八重山島民謡誌』 東京：郷土研究社。
1967 『八重山民謡誌』 沖縄：沖縄タイムス出版部。
1970 『八重山古謡 下巻』 沖縄：沖縄タイムス社。
1977 『八重山民俗誌 上巻・民俗篇』 沖縄：沖縄タイムス社。
- 國書刊行會編
1906 『續々群書類從第九』 東京：國書刊行會。
- 小濱光次郎
1996 『鳩間島追想』 私製。
- 小林 茂
1974 「ユーゴスラヴィアの移動牧畜」『人文地理』 26(1): 1-30。
1984 「南西諸島の「低い島」とイネ栽培」『民博通信』 23: 77-90。
1996a 「ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応」『比較社会文化』 2: 59-73。
1996b 「十五世紀後半の南西諸島南部の土地利用と景觀—『李朝実録』 所載の漂流記録の分析から」 丸山雍成編 『前近代における南西諸島と九州—その関係史的研究』, pp. 161-180, 東京：多賀出版。
2003 『農耕・景觀・災害—琉球列島の環境史』 東京：第一書房。
2004 「環境への適応」 小林茂・杉浦芳夫編 『人文地理学』, pp. 92-104, 東京：放送大学教育振興會。
2005 「疾病にみる近世琉球列島」 財団法人沖縄県文化振興會公文書管理部史料編集室編 『沖縄県史—各論編 4 近世』, pp. 539-565, 沖縄：沖縄県教育委員會。
- 佐々木高明
1978 「『李朝実録』 所載の漂流記にみる沖縄の農耕技術と食事文化」 藤岡謙二郎先生退官

- 記念事業会編『歴史地理研究と都市研究 上』, pp. 414-423, 東京: 大明堂。
- 2003 『南からの日本文化 上—新・海上の道』 東京: 日本放送出版協会。
- 笹森儀助
1894 『南島探験』 私製。
- サーリンズ, M. D.
1984 『石器時代の経済学』 山内昶訳, 東京: 法政大学出版局。(Sahlins, M. D. 1972 *Stone Age Economics*. New York: Aldine.)
- 須藤健一
1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系—ミクロネシア, サタウル島の事例分析」『国立民族学博物館研究報告』9(2): 197-348。
1989 「ミクロネシアの土地所有と社会構造」『国立民族学博物館研究報告別冊』6: 141-176。
2008 『オセアニアの人類学—海外移住・民主化・伝統の政治』 東京: 風響社。
- 關雄二
2007 「ジャガイモとトウモロコシ—古代アンデス文明における生態資源の利用と権力の発生」 印東道子編『資源人類学07 生態資源と象徴化』, pp. 209-244, 東京: 弘文堂。
- 高桑史子
1982 「八重山—島嶼社会における系譜意識の変化—過疎化による社会変容の一側面」『民族学研究』47(2): 157-189。
- 高良倉吉
1982 「近世末期の八重山統治と人口問題—翁長親方仕置とその背景」『沖縄史料編集所紀要』7: 1-45。
- 竹富町史編集委員会町史編集室編
1995 『竹富町史—第11巻 資料編 新聞集成II』 沖縄: 竹富町役場。
2002 『竹富町史—第10巻 資料編 近代2』 沖縄: 竹富町役場。
2006 『竹富町史—第10巻 資料編 近代3 新城村頭の日誌』 沖縄: 竹富町役場。
- 田代安定
1885a 『八重山島管内西表嶋仲間村巡検統計誌』(国文学研究資料館所蔵)。
1885b 『八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌』(国文学研究資料館所蔵)。
- 多良間村史編集委員会編
1993 『多良間村史—第4巻 資料編3(民俗)』 沖縄: 多良間村。
- 近森 正
1988 『サンゴ礁の民族考古学—レンネル島の文化と適応』 東京: 雄山閣出版。
近森 正・塩崎 豊
2008 「生存のための伝統—ナサウ島をめぐる領有問題」 近森正編『サンゴ礁の景観史—クック諸島調査の論集』, pp. 245-282, 東京: 慶應義塾大学出版会。
- 千葉徳爾
1970 「沖縄・八重山諸島のイノシシとその狩猟」『愛知大学文学論叢』44: 129-153。
1972 「八重山諸島におけるマラリアと住民」『地理学評論』45(7): 461-474。
- 得能壽美
2007 『琉球弧叢書13 近世八重山の民衆生活史—石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』 沖縄: 榕樹書林。
- 仲地哲夫
2002 「近世中期における八重山諸島の村落と寄百姓—西表島東部の各村落と周辺離島との関係を中心に」『南島文化』24: 19-26。
- 仲松彌秀
1942 「琉球列島に於けるマラリア病の地理學的研究」『地理學評論』18(4): 49-73。
- 仲吉朝助
1895 『八重山島農業論』 東京: 大日本農会。
- 日本史料集成編纂会編
1979 『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成—李朝實録之部4』 東京: 国書刊行会。
- 野本寛一
1984 『焼畑民俗文化論』 東京: 雄山閣出版。
1987 『生態民俗学序説』 東京: 白水社。

- 花井正光
2003 「シシ垣を掘り起こしてみよう！(6) 亜熱帯の島の多様な猪垣——西表島の地域文化財としての猪垣とその活用の意義」『地理』48(5): 94-101。
- 花城良廣・盛口 満
2010 「鳩間島・海上を通う田仕事」安溪遊地・盛口満編『聞き書き・島の生活誌3 田んぼの恵み——八重山のくらし』, pp. 87-98, 沖縄：ボーダーインク。
- 平良市史編さん委員会編
1981 『平良市史——第3巻 資料編1 前近代』沖縄：平良市役所。
- 藤井紘司
2010 「近代八重山諸島における遠距離通耕の歴史的展開——1890～1970年代における西表島東北部を事例として」『地理学評論』83(1): 1-20。
- 法政大学沖縄文化研究所
2005 『沖縄研究資料22 琉球八重山嶋取調書 全II』東京：法政大学沖縄文化研究所。
- 牧野 清
1972 『新八重山歴史』私製。
- 松井 健
2001 『歴史・文化ライブラリー109 遊牧という文化——移動の生活戦略』東京：吉川弘文館。
- マリノフスキー, B.
1967 「西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア群島における、原住民の事業と冒険の報告」寺田和夫・増田義郎訳、泉靖一責任編集『世界の名著59 マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』, pp. 55-342, 東京：中央公論社。(Malinowski, B. K. 1922 *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: G. Routledge & Sons, Ltd.; New York: E.P. Dutton & Co.)
- 三木 健
1980 『八重山近代民衆史』東京：三一書房。
- ムラ, J. V.
1999 「“新しい” 古典を読み解く 多様な環境の垂直統御——アンデス社会の経済」溝田のぞみ・山本紀夫抄訳、『エコソフィア』4: 89-99。
- 目崎茂和
1978 「地域主義と地理学〈特集〉沖縄における地域」『地理』23(10): 18-25。
1980 「琉球列島における島の地形的分類とその帯状分布」『琉球列島の地質学的研究』5: 91-101。
- 山口景子
1992a 「沖縄県八重山群島でのかよい耕作が島の生計維持システムとマラリアに対する行動的適応に与えた影響」『民族衛生』58(4): 235-245。
1992b 「沖縄県八重山群島におけるマラリア流行と人口変動」『民族衛生』58(6): 307-319。
- 山口 徹
2009 「「高い島」と「低い島」——歴史生態学の視点から」吉岡政徳監修『オセアニア学』, pp. 117-131, 京都：京都大学学術出版会。
- 山本紀夫
1980 「中央アンデス南部高地の環境利用——ペルー、クスコ県マルカパタの事例より」『国立民族学博物館研究報告』5(1): 121-189。
- 渡部忠世
1990 「宝満神社の赤米と踏耕——オーストロネシアの稲作の北上」大林太良著者代表『海と列島文化5 隼人世界の島々』, pp. 378-404, 東京：小学館。
- Alkire, W. H.
1965 *Lamotrek Atoll and Inter-Island Socioeconomic Ties*. Urbana: University of Illinois Press.
1978 *Coral Islanders*. Illinois: AHM Publishing.
- Balée, W.
2006 The Research Program of Historical Ecology. *Annual Review of Anthropology* 35: 75-98.
- Balée, W. (ed.)
1998 *Advances in Historical Ecology*. New York: Columbia University Press.

- Brown, P. J.
1981 Cultural Adaptations to Endemic Malaria in Sardinia. *Medical Anthropology* 5(3): 313–339.
- Goodenough, W. H.
1957 Oceania and the Problem of Controls in the Study of Cultural and Human Evolution. *The Journal of the Polynesian Society* 66(2): 146–155.
- Kaplan, S.
1976 Ethnological and Biogeographical Significance of Pottery Sherds from Nissau Island, Papua New Guinea. *Fieldiana, Anthropology* 66(3): 35–89.
- Kirch, P. V.
1980 Polynesian Prehistory: Cultural Adaptation in Island Ecosystems: Oceanic Islands Serve as Archaeological Laboratories for Studying the Complex Dialectic between Human Populations and their Environments. *American Scientist* 68(1): 39–48.
- Kirch, P. V. and Hunt, T. L. (eds.)
1997 *Historical Ecology in the Pacific Islands: Prehistoric Environmental and Landscape Change*. New Haven: Yale University Press.
- Lessa, W. A.
1950 Ulithi and the Outer Native World. *American Anthropologist* 52(1): 27–52.
- Orlove, B. S.
1980 Ecological Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 9: 235–273.
- Sahlins, M. D.
1958 *Social Stratification in Polynesia*. Seattle: University of Washington Press.
1962 *Moala: Culture and Nature on a Fijian Island*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Terrell, J.
1986 *Prehistory in the Pacific Islands: A Study of Variation in Language, Customs, and Human Biology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas, W. L. Jr.
1965 The Variety of Physical Environments among Pacific Islands. In F. R. Fosberg (ed.) *Man's Place in the Island Ecosystem*, pp. 7–37. Honolulu: Bishop Museum Press.